
たっポン！

ネギタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たつポン！

【ΖΖΠード】

Ζ5Ζ51▽

【作者名】

ネギタロー

【あらすじ】

卓球が好きなくせに、過去の事件を引きずつて高校に入学しても帰宅部のユウヤだったが、バカな友人からの誘いもあり、再び卓球をすることに。卓球を通して成長するユウヤたちの、ふざけっぱなしの青春物語。

体育館一階の卓球場に上がるど、ピンポン球の軽い打球音が響いていた。

「足動かせ、ペース持つてかれるな！」

「はいっ」

「もつとアクティブに動けっ！」

アヤが入部してすぐコーチにじこかれているのを見て、なんだか自分が置いてかれた気がした。実際、アヤがこうして先輩に気を遣いながら球を打っている中、オレはそれを覗いているだけ。バスケットの見学をしてたけど、オレには合いそうもないし。誰にも見つからないように、そつと一階に下りた。

一階の隅のパイプ椅子に座る友人に声をかける。

「オレ帰るわ」

「え、バスケ部は？」

「入んね」

「あ～、コウヤは背が低いからな～」

「うつさい」

嫌味を吐く友人を置いて、一人校門を抜ける、鞄の中に卓球ラケットを入れたまま。入る気もなかつたけどさ……。

男子卓球部、なくなつてんじやん。

桜の木が緑の葉を付け、朝陽をせんせんと浴びている。天気に反して、オレはもやもやを抱えたまま登校していた。

「おーす！」

「おー、ハジメか」

昨日一緒に部活見学をした戸田初だった。

「なんだよ、ぶすーとして」

ハジメに言わされて、自分が不機嫌な顔をしていることに気づいた。

「いや、別に……」

「ふーん、そうか。なあコウヤ」「ん？」

「一緒に卓球部創ろうぜー」

「……はあ？」

それは唐突な誘いだつた。

「いや、部の前に同好会だし。てかお前、バスケ部入るって言つてたじゃんか。なんだよ急に？」

「え？ え？ と、昨日部活見学しに行つたじゃん？ そん時に体育馆一階の卓球場見てたる、お前。いやー、実はおれも前から興味あつてそー」

「いや見てないから」

「まあ初心者だけどおれ運動神経いいし、それにコウヤは元卓球部だつたよな？」

「中ーん時に辞めた」

下駄箱で上履きに履き替えながら、ハジメが話を続ける。

「ほら経験者じゃん、やるつきやないって」

「帰宅部でいい」

「一人確保つと。あとは誰がいいかなー？」

「おい無視すんなって」

廊下を歩きながら、ハジメが別のターゲットを見つけた。

「あ、山下君！ 部活もう決めた？」

クラスメイトに駆け寄るハジメ。勝手に話を進めそうなので阻止しようとハジメのあとを追つ。

「卓球同好会創ろうとしててさ、今オレとコウヤがいるんだけど。山下君、卓球やつたよね？」

ハジメの背後のオレに田を合わせ、山下君は氣まずそうな顔をした、はつきりと。

「「じめん、もう他のとこ入っちゃったんだ」「
そう言つて、足早に去つてしまつた。

「……オレはやらな「からな」

そう言い残して、さつさと教室へ向かつ。
「えー、なんで?」

ハジメがオレを追いかける。しつこい。

「もう卓球やりたくねえんだよ。それにオレがこると本当に誰も集
まんねえぞ?」

「なんで?」

「嫌われてんだよ、卓球やつてた奴らに」

「意味わかんな「つて」

「お前や」

話の途中、誰かにぶつかつた。謝りつと相手の顔を見る。アヤだ
つた。

「あ、「じめん……」

田も合わせらず早口で言つた。知り合いなのに驚くほじオレ無愛想。
アヤも一言、「じめんとだけ言つて通り過ぎていつた。

ハジメの方に向き直る。

「とにかくオレはやる気ねーから、他の奴……おい、ハジメ?」
遠のくアヤの背中を見続けるハジメ。「こいつ、口が半開きになつ
てる……。

「お前、もしかしてアヤ田~~田~~で卓球」

「てめえあの子とど~~じう~~う関係だ? 紹介しろ!」

ハジメの凄みに少し後ずさりしてしまつた。

「えつ? いや、家が近所で小、中が同じ学校だつただけで…… て
かやつぱアヤ狙いかよ!」

「一緒に卓球がんばろうぜ!」

ハジメが力強く親指を立てた。

「やるわけねーだろ」

「……じゅあや」

ハジメがしおらしくなつて言葉をゆづくつつなげる。らしくない。あつ、今こいつ本気なんだ。

「今日の放課後、職員室に顔だけでも出してくんない？ 昨日、卓球部創るつて担任に言つたら顧問してやるから来いつて言われたんだ。一人しかいなのに同好会も何もないじゃん？ 顧問まで見つからなかつたら本当に諦めるしかないし」

その1（後書き）

初投稿です、よろしくお願ひします。じゅがりこ大好きです、よろしくお願ひします。

放課後、ハジメと一緒に職員室へ向かうと、職員室前に見慣れない生徒が一人立っていた。上履きの色からしてオレらと同じ一年生だ。ハジメが話しかけた。

「君、もしかして卓球部に入りに？」

「はい！ えと、戸田さんですか？」

職員室前のやりとりで一人置いてけぼりをくじつ。

「ハジメ、誰？」

「あ、ぼく、牧野敬^{まきのけい}といいます。ポスターを見てきました」

「ポスター？」

「そそ、これこれ」

ハジメは自慢げに鞄から男子卓球部員募集の団を書いたポスターを出した。

「お前っ、創れるかどうかも分かんないのにそんなの貼つたのか？」

「創るつづってんだろー」

「てか何だお前の行動力、どんだけアヤのこと好きなんだよー。」

「いや、そんなんじやねえって」

「牧野君、オレはただの付き添いだから。あとは一人で頑張つて」

「一人に背を向け、廊下を歩き出した。

「ユウヤ、お前だつて卓球やりたいんじやねえのかよ？」

「全然」

振り返らずに階段を下りた。

風が冷たい。バスはまだ来ない。学生たちが長蛇の列をつくつてバスを待つ。面倒事を避け、周りと同じような生活をする。風は冷たいけど、そうすれば強い風当たりを受けることもない。これでいいんだ。

もう、卓球することないのかな…………？

バスが見えた。それと同時に、携帯電話がメールの受信を知らせた。
ため息を一つつき、次には列を抜け、学校へと歩き出した。

ハジメからのメール。
『助けて！』

ハジメからの指示で体育館二階の卓球場へと向かう。体育館に入るとカコン、カコンとピンポン球を打つ音が単発的に聞こえた。どうなつてんだ？

階段を上ると、一台の卓球台を多数の女子が囲み、その中に間を空けて牧野君が立っていた。状況が呑み込めない。牧野君に声をかける。

「あっ、さつきの

「

「橋本優弥だ。どうなつてんの？」

「それが、先生と男子卓球部の話をしようと職員室に入ろうとしたら、女子卓球部の人達に呼び止められて、その、妨害されて……」

「それで、卓球で勝負？」

「はい、先に一セツト取つたら認めてやるつて。でも見てられない程差があつて……」

台に目を向けると、ハジメがぎこちなく構えている。向かいに立つのは、またもやアヤだった。しかもかなり力の入りようだ。初心者じゃ反応できない速さのサーブを、バックやミドルの奥深くに突き刺す。ハジメは当然レシーブもできずに、一発で終わる。卓球は頭脳戦と言うが、それ以前に技術の差がありすぎる。

「アヤちゃん、どんどんやつちやつてー」

「……はー」

「相手よわつ」

逆転劇もなく、ハジメは負けた。

「ユウヤ、助けてくれー！」

「ヒソヒソ……ねえねえ……次どうする？……今来た奴で最後にしようよ……もう一人の子かわいいよね……だよね！……癒し系な……垂れ目だけど顔きれい……ヒソヒソ……。」

「コホン。それじゃあ、もう諦めたら？」

「ユウヤ～」

女子卓球部もハジメもオレを見てきて、さてどうしたものか。アヤに勝てんのか？ てか、なんでオレが？

「じゃあ、次はぼくが！」

牧野君が意を決して名乗り出た。

「「「ダメツ！」」」

アヤ以外の女子卓球部員が声を合わせて牧野君を制止。さっきの試合といい、このプレッシャーのかけ方といい、なんてえげつないんだ。

「オレがやります」

その2（後書き）

若い人向けに書いているつもりなので、口調など、全体が砕けた文となっています。若者風と考えれば考えるほど分からなくなります。人はいつから若者ではなくなるのでしょうか？　過去を顧みるようになつたらでしょうか？

「ラブオール」

ズボンの裾とYシャツの袖をまくら上げ、動きづらさはあるものの、自前のラケットを鞄に入れっぱなしにしてたことは不幸中の幸いで、試合は始まった。

さつきと変わらない速さでアヤがサーブを打つてくる。でもヨースは読めている、即座にレシーブ。アヤは落ち着いてバックで対応、それでも球速が落ちるわけではなく、守るようにならうからもバックハンド。バックバックバック。こつちはペン、向こううちはショイクハンド。バックでの打ち合いは分が悪い。

またバックへと返ってきた。だがオレは「いじめ」とばかりに回り込んでフォアアハンドで返す。若干スマッシュ味に無理やり押し込んだ。だが間髪入れず、球はオレのコートに返ってきた。ライジングか……！ 自分のコートでバウンスした球を、上昇しきる前に弾き返したんだ。踊られた。

オレがここまでやるとほ思ひもしなかつたんだろう、その場にいた連中がざわめいた。

……ざわざわ……つよ……やつぱり経験者なんだ……勝てるの？
……アヤちゃんかわいい……ざわざわ……。

アヤのサーブは速く、おまけにいくつもの回転を使い分けてくるため、慣れないと翻弄されやすい。けどこいつの手首の動きを、オレは何度も見てきた。左！ もうペース持つてかれねえ！ オレの返球をアヤはバックで返してきた。オレはそれを、今度はバックはバックでも、上回転のバックドライブで思い切り攻め込む。手首いてえ。回転のかかった球をなんとか打ちつなげるアヤ。ゆるい返球を間髪入れず、今度こそフォアアハンドでどどめ！ さすがのアヤもこれには追いつけなかつた。ピンポン球が床で跳ねる音だけが聞こえた。

「小さいのにやるなあ……」

「彼くらいの身長なら、むしろ卓球に関しては利点になるわ

「え、そんなんですか部長?」

「他の球技と違つて、卓球は決められた高さの台を使う。背が高すぎると必要以上に身を屈めなければいけないから、それよりかはちょっと足を曲げただけでちょうど良い高さになる彼の体型の方が恵まれていると言えるわね。まあ、リーチが短いのはネックだろうし、プレイスタイルにもよるから偏に言い切れないけど」

「部長、羨ましいんですか? 自分が背高いからって

「私はカットマンだからいいの

打つてくれと言わんばかりの、アヤの浮いたレシーブをスマッシュした。

「すごい、サーブの時は確実に点を取つてゐるー」

牧野君の発言にむつとした女子部員が、

「先生のお気に入りなんだろ? 負けんなよ

「……」

先輩の一言に、アヤは返事をしなかつた。目を伏せて、怯えてるかのようだつた。

アヤにサーブ権が移る。下回転のサーブをツツツキ（下回転のかかった球を、台の上でつづつくような動作で下回転をかけて返球すること）で返そつとするが、ネットに引っかかつた。

オレのサーブにアヤはすぐ反応、ドライブショットを勢い良く打つてくる。球はオレのラケットに当たつてコートの外に飛んでいった。

サーブを読まれるよくなつたのは、オレがフォイントをかけるのをやめたから。

勝つことを諦めたのは、居場所がなくなるつらさを知つてゐるか

「男子卓球同好会、どうしても創っちゃダメですか？」

みんなの視線がハジメに向けられ、一呼吸置いてから、

「……去年の男子が、ねえ」

「練習態度が悪くて、こつちまでとぼちり受けちゃって」

「あとうちらのメンバーの何人かに手出さうとした奴がいてさ、それで一時期、内部でもめちゃったのよ」

「うつわ、そんなことあつたんですか？」

ハジメには耳が痛くなるような情報だ。

「それに今年は新入部員が多いし、これ以上卓球場に入られても

……」

「場所は別の所を探します！」

牧野君が強く訴える。

「真面目に活動しますし、みなさんに迷惑をかけないようにしますから、卓球やらせてください！」

牧野君の純粋な瞳に、女子部員らが後ずさりしていくように見えた。

「ダメです」

一人堂々と立ち続ける女子が言い放った。

「部長、もういいんじゃない？ この子らもこいつ言つてるし」

「いいえ、彼らは試合に負けたのだから、卓球同好会の創立は認めません」

「……じゃあ、ピンポン同好会とかは？」

ハジメ、ふざけた提案はやめてくれ……。

「なつ、そんなの同じ」

「認めます！」

部長の発言を遮る大声。誰？ その場の全員が声の聞こえた階段方向を見る。上ってきたのは、一人の女性だった。所々癖つ毛が跳ねたままの黒の長髪と、吊り上がった目が印象的な人だった。

「私が顧問をやりましょつ

「三神先生！」

助け舟が来たとばかりに喜びながら、ハジメは先生の名を呼んだ。
「戸田君、職員室に来なさいって言つたでしょ？」

「色々と諸事情がございまして……」

三神先生は向き直り、

「なあ、瀧野」

呼ばれ、部長の瀧野先輩が返事した。

「この子らに卓球やらせてあげてくれないか？」

言われて、三神先生を無言で見つめる瀧野先輩。三神先生は視線をまっすぐ受け止めた。

「……分かりました」

搾り出したかのよくな、低く沈んだ声だった。

「はいこれ、同好会設立申請書。書いたら私のとこ持つてきて」

職員室に戻り、三神先生が紙を差し出してきた。

「先生なんでこんなに良くしてくれるんですか？ すぐ面倒くさがりっぽいのに」

一言余計だハジメ。

「そりや生徒のためだし、それにどうせどつかの顧問やるなら楽そ
うなとこがいいだろ？」

「先生正直つすねー」

「面倒くさがりだつー！」

一呼吸遅いです先生。

「ひーつ！」

牧野君びびりすぎ……。

「失礼しましたー」

職員室から退室する。

「よし、あとは人数と場所だな」

「オレ入るだけでやる気ないから」

「ユウヤはまだそんなこと言つてんの?」「

「お前じゃアヤ無理なの分かつたんだから、もうやめたら?」

「最初から狙つてないし、それにもだ諦めがつかないぜー。」

「どっちだよ」

「あの、アヤさんつて誰のことですか?」

「氣安く呼ぶなつー。」

「ひいつー。」

「いや、ハジメこやなに様だよ」

その3（後書き）

試合描写が難しいです……。

今回以降から卓球用語が所々出でてきますが、
つている場合がございます。ご了承下さい。

見解、説明が多少間違
ググれオレ。

ぼくがバス停に立つていると、若干赤茶色をしたロングヘアの、学生服でなければ〇しにでも間違えられそうな、大人びた女性が隣に立ちました。瀧野先輩です。女子卓球部の部長を勤める一年生で、ぼく達がピンポン同好会を創ることを一番反対しているようです。ご近所さんだとは知りませんでした。

昨日の、戸田君も橋本君も負けたのに同好会を創ろうとし続けるぼくらを、きっと良く思つてないでしょ。どうしよう、とにかく田を見て挨拶しなきゃ……。

「まだよ」

挨拶する前に話しかけられ、裏返つた声が少し漏れてしましました。

「同好会を創るには全員で五人。あと一人足りない」
バスが来ました。固まるぼくを横田に、瀧野さんがバスに乗り込みました。

朝の校門。大勢の生徒や先生が通り過ぎていく。その横でオレ達は、ピンポン同好会勧誘の呼び込みをしていた。恥ずかしい、罰ゲームを受けている気分だ。

「橋本君」

牧野君がオレに話しかけてきた。

「あまり恥ずかしがると、返つてきこじやくなくなるよ」

「じゃあ、ハジメみたいに大声だしてしつこく勧誘しきつて？」

「そこまでは言つてないけど……」

ついついため息をしてしまった。

「……ピンポン同好会に入りませんかー？」

「入りませんかー？」

オレ達を指さして笑う奴、関りたくないと無視する奴らが通り過ぎて行く。

予鈴が鳴り、オレ達も教室へ向かう。途中、グラウンドを見ると、サッカー部が朝練の片づけをしていた。オレ達はまだ始まつてすらいない。

「困るなあ、勝手にこいつ」とされると

薄くなつた白髪をオールバックにしたおっさん教師が面倒くさそうに言つた。

「でも、おれのハートが止まらなかつたんですね！」

おっさん教師が睨みつけてきた。オレとハジメと牧野君が頭を下げた。

今日は最悪だ。昨日、ハジメが作つて貼つたポスターだが、生徒会の許可もなく校内に貼り付けてたらしく、その件で呼び出しきらつちました。活動する前から目つけられてどうすんだよ……。

「先生、プリント持つて来ました」

「おう、昼休みに悪いな」

他の生徒からプリントの束を受け取ると、おっさん教師がこちらに向き直つた。

「ポスターを生徒会に提出すれば許可印を押してくれるから、貼つたのをすぐ回収してくること。もうこいだ」

さつさと帰ろうとしたが、プリントを持つてきた生徒が「それ何です？」と話に入ってきた。空氣読めよ……。

「ピンポン同好会創るらしー」

「ピンポン？ ああ、卓球すか」

ふーんと、卓球と分かり興味を失くしたようだ。

オレ達は解放され、すぐ職員室を出た。

「あつ、ケイ君だ！」

今度は誰かと思えば、女子卓球部の先輩達が牧野君に駆け寄つてきた。

「ケイ君元気？」

「あ、はい。元気です」

「かわいー！」

牧野君のおかげだ、女子卓球部員のほとんどはオレ達を敵視しなくなつてくれたみたいだ。

「なにかあつたら声かけてねー！」

牧野君と話しあふと、反対側に歩きながらもキャーキャー楽しそうにはしゃぐ先輩達の声が聞こえた。

「モテモテじゃん、ケイイ君」

ふざけた態度で牧野君の名前を呼ぶハジメ。

「な、なに言つの戸田君！ 先輩達の真似してからかわないで！」

「からかってねえ、妬んでるんだ！」

「余計に不純だろ。な、ケイ君？」

「もう、橋本君まで！」

「いいじゃん、ケイイ君」

「ハジメ、ほどほどにしろよ..」

「いいもん、ぼくも一人のこと下の名前で呼ぶからねー！」

「ちょっと怒らせちゃつたかな？」

三人で話していると後ろから、

「おつ、俺も入れてくれ！」

突然の声。振り返るとさつきプリントを持ってきた生徒が立つていた。しばらくの沈黙。言われたことを、みんなすぐには理解できなかつた。

「ピンポン同好会に？」

ハジメがそう質問した。

「おう、もちのろんだぜ」

言い方うぜえ。しかもこの流れで入会つて、下心丸出しだ。

「あんたみたいな積極的な奴を待つてたぜ、よろしくくな！」
ハジメは人を見る目がない。

その4（後書き）

ハジメは書き始めの頃からネタ要員と決まっていました。私の手のひら、いや、原稿用紙の上で全力で踊ってくれるいい奴です。

職員室前で中嶋が入会したことにより、残るは一人。だが、最後の一人がどうしても決まらない。わらにもすがる思いで、オレは一人、アヤの家を訪問した。

「えつ？ えと、三角筋！」

「広背筋！」

オレの動搖による軟弱レシーブを、タケシ先輩は踏み込んでの豪快なドライブで打ち返してきた。球が横を通り過ぎていく。

タケシ先輩の方を見ると、すでにサーブの構えに入っていた。慌てて身構える。

「胸鎖乳突筋！」

流れるよつなサーブフォーム。引退したにも関わらず球は速く、重い。

「じょ、上腕二頭筋つ」

「アキレスけえええええええんつ！」

タケシ先輩はスマッシュを真上から叩きつけ、鋭角に急降下した球が高々とバウンドしてオレを超えるほどぶつ飛んだ。

「次はユウヤのサーブだぜ？」

「いや、タケシ先輩、オレは普通に試合つったのに、なんで卓球で古今東西することになってるんですか？」

「そうなる、ちょっとこのお題はダメだな。何も知らない人に聞かれたらぜつてえ怪しまれるな」

「そうじゃなくて……まあそつちもそつなんんですけど」

「じゃあやめるか？ 同好会創るんだろ？ 僕の名前が欲しいんだろ？」

タケシ先輩がまっすぐ見つめる。相変わらずクサイ人だ。ラケットを構えた。台の向こうのタケシ先輩が、にやっと笑った。

中学の卓球部に入部した時、タケシ先輩は部長を任せていた。持ち前の性格で人望も、そして卓球そのものの強さも兼ね備えたタケシ先輩は憧れであり、目標だった。オレとは一年の差があったせいで部内では長く付き合えなかつたが、タケシ先輩の妹のアヤとオレに接点があつたおかげか、今でもたまに卓球の相手をしてくれる。

「直江鎌繼！」

「島津義弘！」

勢いの乗つた球。オレは追いつげず、無様に空振り。

「タケシ先輩、日本史苦手じや……？」

「最近歴史ゲームにはまつててな」

「受験生なのに何やつてるんですか？」

「歴史選んでる分ましだろ？ そら、服部半蔵！」

「石川五右衛門！」

三年前。外の蝉時雨も消される程の活氣あるかけ声。田差しを暗幕で遮つていたにも関わらず、館内は卓球に熱せられたかのようにみんな真剣だつた。

タケシ先輩の中学最後の試合は、ファイナルゲーム内で「デュース（十一点先取で一セット獲得だが、両選手が十点で並んだ場合、二点リードした方がそのセットを獲得するルール）が七回も続く接戦だつた。

どちらが勝つてもおかしくない試合で、タケシ先輩が負けた。

今もオレの脳に焼きついている、暑い夏の日の記憶。

「そういえば、何でタケシ先輩は卓球部入らなかつたんですか？」

「ああ？ 行つてみたらふざけた奴しかいなかつたからだ」「なるほど、女子卓球部の話どおりだ。

「おらおら、次打つぞ！ ギガデイン！」

タケシ先輩がサーブを打つてくる。ツツツキの構えをした。

「メラゾーマ！」

途端に、球は高く浮いた。回転を見誤つた！ 急いで大きく後ろに下がる。タケシ先輩は大きく振りかぶつた。

「ベホ―――イミツ！」

ラケットを思い切り振り落としてくるかと思ひきや、球の落下地点にラケットを置くように差し出してきた。弱々しくラケットに当たった球が、ネットギリギリを越えて、力なくオレの台に落下した。オレの元に届くことなく、台の上で何度もバウンドして転がつていった。

「ハツハツハツ、ひつかかつたなあ！」

やられた、この人はパワーイヤーに見えて、ちゃんと技術を持つている人なんだ。むしろフォームやテクニックがこの人の力強さを冴えさせる。

相変わらず楽しそうに卓球する人だ。

今も、夏の引退試合でも、タケシ先輩は楽しそうに、全力で卓球してた。オレも卓球がしたい。これからも卓球を続けたい。オレは大きく息を吸い込んだ。

「お題、中学時代にアヤに告白した男子生徒の名前！」

「な、待て、お兄ちゃんそんなの聞いてないっ！」

思いもしなかつたお題に、慌てふためくタケシ先輩。

「臼井！」

「え、ええ？」

打ち返すことすらできないタケシ先輩。

「はい、何も言えず失点。どんどんいきますよ、山口ー！」

「やめろお、そんなの知らない、知りたくないっ！」

さつきまでの勢いが嘘のように非力になるタケシ先輩。

オレの番では答えられず、タケシ先輩がお題を出しても戦意を失つたのか、ラリーがあっけなく終わる。

ごめんよ臼井、山口、高幡、じゅんpei、松本に熊田君、相沢、小田……。うん、アヤは女子卓球部の中でもかなり可愛い方だつたもんな。みんなもアヤもオレも悪くないよきっと！ でも恨む

ならアヤと付き合っているかなんて事前に確認してきた、まだ若く青すぎた自分達を恨んでくれ。オレはただの幼馴染なだけだって。

「もう、やめてくれ。俺の、負けだ……」

立っているのがやつとの中、タケシ先輩が白旗を上げた。五人、揃つた。

その5（後書き）

スマッシュと見せかけて浅い所に落とすのは、やられると非常に悔しいものです。逆に仕掛けた方はしてやつたりです。ナルシストめ、男らしく全力で打つてこいや、なんて血がのぼらないようにします。

階段で、オレと中嶋が一人で卓球台を運び、ハジメが誘導しながら手を振る。

「はいオーライ、オーライ」

「しかしラッキーだつたな、女卓がちょうど卓を貰い換えてお古が余つてたんだから」

「ふつ、おれの交渉術があつたおかげだな」

「ちげえよ！ ケイ君が頼んだからこそだし」

「でも空き教室を教えてもらつたのはおれだもん……」

「勧誘ポスター 注意した白髪の先生が好意で教えてくれたんだろ、お前は問題起こしただけだ」

「ふてくされるかのように誘導の声が小さくなつた。

「てか、おもつ！ ハジメまだ一回も運んでねえだろ。代われ今すぐ！」

ハジメが反論する。

「バカヤロウ、おれが一番オーライが上手いんだろ！ おれがオーライしないでどうする！」

「んなもん誰でもできるわつ！」

教室の扉が開かれた。

「うつさいぞお前ら、たかが台を運ぶくらいで騒ぐな！」

三神先生が怒鳴つた。

「はーい、すみません」

卓球台を床に下ろし、ローラーを転がして教室に押し入れた。

「たかがじやないですよ、三神先生」

窓を雑巾で拭きながら、ケイ君が言つ。

「これでやつと、卓球ができるんですから」

「牧野……」

「えへへ、ちよつとクサかつたですね」

ケイ君が照れくさそうに頭をかいた。

「コノヤロウ、ちょっと女子に人気があるからって調子のんなやガキがつ！」

「ひいつ、先生ひどい！」

「そーだそーだ、おれも女子からモテたいぞチクショウ！」

「ハジメさほんなやあ！」

どの教室にも人気がなくなつた放課後。だが一階の、学生棟の端に位置する教室はオレ達のはしゃぐ声で騒がしかつた。

「なあユウヤ、ネットってどう張るんだ？」

中嶋がオレに訊いてくる。するとハジメが、

「なんだ、なかちはそんなの知らないの？」

「なかちんつて、変なあだ名つけんなし！」

「ユウヤ、おれにもネットの付け方教えてー！」

「お前も知らねえのかよ」

呆れつつ、ハジメにもネットの張り方を教える。初心者ばかりだと疲れる……。

「うおお！ できたできた！ よし、そしたら練習あ——つ！ そついやラケットも球もねえ！」

「あ、ぼくも持つてない」

「俺もだ」

こいつら二つか抜けてんだよな……。

「初めの内は体育用のを借りたらいいんじゃね？ てか、初心者のお前らにマイラケなんてはえーよ」

へつへつへつと、いやらしく笑つてみせた。

「いや、俺元卓球部だし」

中嶋の意外な発言に、全員がどよめいた。

「なんだよなかちん、そういうの先に言おうぜ？」

「中嶋は中学どこよ？ 大会で見た記憶ないんだけど」

「そりゃ大会出たことねーし」

あつけらかんと返答する中嶋。

「え？ 部員だったのに？」

「いやー、一週間で辞めちゃってやー」

「んなもん入つてた内に入んなねーよ」

「ねえ、そろそろ練習しよー？」

ケイ君がみんなを促した。

「なあユウヤ、なんかラケットが一種類あるんだナゾ、どう違うんだ？」

ハジメが真面目な質問をしてきた。

「オレが使つてるのがペンホルダー。で、今お前が持つてんのがシエイクハンド。ペンはフォアハンドが強くて、逆にバックハンドで攻めるのが苦手。シェイクはフォア、バックハンド両方で攻撃に転じるこじができて、あと分かりやすい特徴として、ラバーつていう、球を打つゴムがペンは基本一枚、シェイクは裏表で一枚つてなつて

」

「どうやーつ！ 四手に持つて一刀流だつ」

「武藏、覚悟しろ！」

ハジメと中嶋がオレの長つたらしい説明に飽きて、ラケットで遊び始めた。

「二人とも、せつかく説明してくれてるのにふざけやダメだよ」

「いやー、すまん」

恥びれた様子もなく謝るハジメ。

「じゃあもうお前らシェイクでいいんじやね？ 今じゃほとんどが

「うだ」

「ユ、ユウヤ君、そんな投げやりにならなくとも……」

ケイ君の方に向き直った。

「違うんだ、テキトーとかじゃなく、今じゃもう本当にシェイクが大半なんだ。プレイスタイルによるけど、バックハンドで攻められるのは相当な強みで、普段ペンホルダー相手に練習しないから、

試合でペンと当たつたら不慣れな分不利だなんて言われちゃうくら
いショイクばつかなんだ。どいつもこいつもシェイクシェイク……
「ああ、コウヤ君が良く分からぬコンプレックスで落ち込んで
る……」

「よーし、おれシェイクにしよー！」

「俺も！ ケイもほら持つて、練習すんぞ！」

中嶋がケイ君にシェイクハンドを手渡す。

「え、待つて、ぼくまだ決めてない……」

「シェイクでいいじゃん。だってほとんどの人がシェイク使うって
ことは、それだけ強いってことだろ？」

「で、でも……」

「ほうら、また一人一人とシェイクが増えていく。ふふふ、ふふふ
ふふふ……」

「コウヤ君？ コウヤ君っ！」

少子化によつて使われなくなつた教室に、お古のオンボロ卓球台。
初心者が握る、授業用の安物ラケット。先輩のいない、四人の一年
生。寄せ集めだけど、きっとこれが今のオレ達のベストなんだろう。
卓球ができる。

「まずは素振りから始めるぞー」

「えーっ、球打とうぜー？」

「基本もできてない奴がほざくな」

「入らないつて言ってたのにコウヤ君が一番やる気満々」

「ケイ君、それ本人には言っちゃダメな。やる気なかつたこと思い

出しちゃうから

「ほら一人、話聞いてんのかー？」

ハジメとケイ君の方を見る。視界の隅に、廊下の人影が映つた。

小さな背丈と肩に届くくらいの長さの黒髪。覚えのある後姿が、体
育館に向かつて通り過ぎていつた。

兄の影響が強かつた。きっかけは兄が卓球をするのを見ていたからだし、初めてラケットを握ったのも家の庭に置かれた、親が兄のために買つた卓球台でだつた。

小さい頃は、母が良く相手をしてくれた。同年代には大抵勝つ兄を見て、スポーツ選手の子を持つ喜びに目覚めたからだろ。

小学校に入学しても、相変わらず打ち続けた。たまに兄も相手をしてくれて、敵いつこなかつたが、それでも楽しかつた。

小学四年生になつてからある日、母親に、兄と同じように近所の卓球会に入るか訊かれた。兄もそこで同年代や年上を相手に練習していると聞かされ、深く考えもせず、うんと返事した。

聞いていた話どおり、そこには自分と同世代の女の子が、多くはなくとも、それなりにいて、卓球の打球音が響いていた。ラリーの時は一定のリズムで、試合の時は、不規則かつ力強く。

馴染めなかつた。人見知りの激しい性格で、すでに出来上がつた集団の空氣に溶け込むのは、私には難しかつた。

母さんやお兄ちゃんと打つ方が楽しい。

入会して一ヶ月後には通うのを拒むようになつた。幼心に罪悪感が生まれ、家で卓球をすることもなくなつた。

卓球から遠ざかつたまま、中学生になつた。自分や、昔から見知つてゐる友達が制服を着てゐるのを見て、なんだかドキドキした。

入学早々、友達何人かと部活見学ということでいくつかの部を回つた。大して生徒の多い学校でもなく、入る部は限られていた。

バレーもバスケも好きじやないし、大変そ。男子卓球部にはお兄ちゃんもいるし、卓球をするつもりはない……。手芸部か何かにしようと考えていた。

友達の一人が、次は卓球部を見よつと言つた。付き合つだけのつもりで、うんと頷いた。

少しの間、女子卓球部を見学していると、先輩が自分達にラケット

トを握らせた。軽くフォームを教えて素振りをさせると、一人ずつ順番にフォア打ちの相手をさせた。

自分の番がきた。ゆっくりとした球出しを、私は普通に返球した。未経験者ばかりだったせいか、先輩は球が返ってくるとは思わなかつたらしく、驚きながらラリーを続けた。借りた授業用のラケットは使いづらく、それでもフォアハンド程度は問題なく打てた。リズミカルな打球音、ラリーは続いた。

突然先輩が打ち損じ、球が私のバックハンド側に向かつてきた。冷静に裏面で打ち返すと、球は台にバウンドし、そのまま先輩の横を通り抜けていった。

私が経験者だということが分かつた途端、先輩に部へと勧誘された。他の先輩達にも強く言われ、困惑しながら適当に相槌を打つた。

「みんなも入つてよ、ちゃんと教えてあげるから

言われて、楽しそうだし入ろうと、みんなの意見が決まつたらしくつた。何の返事もせず、周りに流されるように自分も卓球部に入部した。

流されるように入つた女子卓球部は、思いの外居心地が良かつた。先輩達は優しかつたし、知つている友達がいるという頼りがあつたこともそうだが、何より、自分にはわずかながらの実力があつた。未経験者と比べれば頭一つ飛び抜けて当たり前だ。技術を評価してもらえる。何か一つ認めてもらえば、人間関係はスムーズにいくものだつた。

なんとなくな接点しかなかつた卓球が、いつの間にか楽しく感じるようになつていて。狙いどおりのコースに決まれば嬉しくて、どうすれば球が速くなるか考えて、新しいサーブを教えてもらつたら居残つて練習して、大会はいつも新鮮な気持ちにさせてくれて、弱点ばかり突かれると本気でイラついて、上手くなつてきた同級生に負けると悔しくて、空回りしている自分にへこんで、たまにだが、また兄が卓球の相手をしてくれるようになつて、一度負けた子を負かして、やっぱり卓球が好きで、色んな人と接した。

私の居場所が、その時は確かにあった。

高校でも卓球を続けようと決めていた。一緒に卓球をしてた友達と部活見学に行くと、中学以上の人数と活気が目に映った。すぐさま入部した。

すると何故か顧問の先生に気に入られてしまった。素質がある、もつと強くなる。そんな言葉を並べられ、入部してすぐに私専用の練習メニューが用意された。他の子と同じ扱いをしてくれない。褒められて少し嬉しかつたが、すぐにそれ以上の孤独に苛まれた。それから先輩達の視線が突き刺さるようになつた。萎縮してしまい、上手く接することができない。他の一年生は先輩達とだつて楽しそうに話しているのに、私はその輪に入ることすらできない。距離を置かれる。私が口を開くときだけ静まり返る。視線が合つのが怖くて、無意識に床ばかり見つめてしまつ。

私は変われてなどいなかつたんだ。卓球から、人から逃げ出したあの頃と何一つ。なんてちつぽけなんだ。

それでも部長だけは、私にも優しく声をかけてくれる。部長まで妬まれてしまうかもしれないのに、申し訳なくて仕方がない。辞めたほうがいいのかな……。

私は、ただ卓球がしたいだけなのに。

「ハジメ、またフォームが崩れてきてるぞ」

「いつまで素振りすんだよー？」

ハジメがぶーぶー文句を言つ。

「オレが中学ん時は一ヶ月球拾いだつたから

「はー？ なげえよ」

部室のドアが開かれた。

「みんなやつてるかー？」

顧問の三神先生だつた。

「先生、どうしたんですか？」

中嶋が訊くと、三神先生は高らかに手に持つていた書類を掲げた。

「喜べ、お前達の初試合が決まったぞ！」

全員が一瞬、ぽかんとする。間を空けて、

「うおお、先生すげえ！ ちよーやる気じやないすか！」

ハジメが興奮しながら声をあげた。

「先生、そのプリント見せて」

はいよと、中嶋に手渡した。

「へえー、団体と個人戦があるんだ」

オレとケイ君が横から覗き込む。日付を確認し、頭の中が一瞬真っ白になった。

「……えつ、これ来週じゃないすか！」

「うん、そうだよ？」

三神先生がけろつと答える。

「先生、ベタつすねー」

ハジメが率直な感想を述べた。のんきなこと言つてやがるー。

その6（後書き）

今回は少し長めとなってしまいました、区切りが難しいです。

土曜日の朝。駅前の駐輪場に自転車をとめる。だいぶ暖かくなつてきた。チャリを飛ばしてきたせいで大会前から汗ばんでしまつた。朝日がまぶしい。

階段を上がり、改札に目をやるとケイ君が見えた。

「おはよう、ユウヤ君」

「おはよ」

切符はもう買つてゐるらしく、オレも財布を取り出し、値段を確認してから切符を買つた。改札口のそばのケイ君まで戻り、人波を避けるべく隅に寄る。

「あとはハジメ君と中嶋君だね」

「だなー。まあまだ結構時間あるけどね」

携帯電話のディスプレイで時間を確認する。オレ達が乗る予定の電車にはまだ余裕がある。

「でも急だよな、いきなり試合とか」

「だね、まだラリーも続かないのに……」

「技術もだけど、何よりルールとかみんな慣れてないのがな……。

前も言つたけど、試合に負けたら次審判だからな」

「審判こわいなあ……。でも

ケイ君が自分の鞄の中からなにやら本を取り出した。

「じゃじゃんつ、卓球のルールブックで勉強してきたんだ！」

ケイ君が無邪気な笑顔を見せた。

「へへ、えらいじゃん！ オレも中学生の頃に買ったことがあるよ」

見せてという意味で、手のひらをケイ君の方に出す。手渡され、パラパラとめくると、ピンクの蛍光ペンの線がいくつも引かれてた。

「ういーす！」

手を上げながら、ハジメが近づいてきた。ありがとうと、ケイ君にルールブックを返す。それを見ていたハジメが、

「なにその本？ ケイ君の？」

「うん、そうだよ」

「ケイ君は勉強熱心だなー。ちょっと見せて」

「それより先に切符買って来いよ」

「横から言つと、ハジメは、あーそعدان and 納得した。

「切符いくらだっけ？」

「自分で見て来い」

「……あー、えと、なんて駅に行くんだっけ？」

呆れてため息が出た。

「で、なかさんは？」

切符を手に戻ってきたハジメがそう訊いた。携帯の時計を見ると、電車に乗る時間が刻々と迫っていた。遅い。

「メールはした？」

「うん、だけど帰つてこない……」

ハジメが電話をかける。

「……出ないわ。じうする？」

全員が押し黙り、固まる。

「……予定どおりのに乗らないと練習時間なくなるぞ？」

オレが電車に乗らうと促す。

「でも……」

ケイ君が何か言いたそうにもじもじしている。

「その次の電車でも開会式には間に合つ？」

「……うん、きりきりだけど」

ハジメの質問に、ケイ君がおどおどしながら答えた。

「じゃあもう少し待つか、すぐ来るかも知れないし」

待つている間に何度も電話をかけたが、中嶋が出ることはないかった。先に会場へ向かうとだけメールを送り、電車に乗る。

「どうしたんだろうね？」

「寝坊じゃね？」

ハジメが深く考えず答える。

「けりつと言つたな、初試合で寝坊とかねえわ」
オレが不機嫌そうに言つと、ハジメが場の空気を変えよつと、話題を振つてきた。

「そういうや、この試合つて女子卓球部も出場するのかな？」

「この前話したら出ないつて言つてたよ」

「ケイ君また女卓の先輩達と話してたのか、コノヤロウー！」

「だ、だつて話しかけてくれたんだもん……」

「うぎやー、モテる発言すんなつ！」

「おーい、騒ぐなよ」

電車を降り、駅を出てすぐそばに立つていたバス停の時刻表を見る。

「次のバス何時ー？」

ハジメが駆け寄りながら訊いてきた。

「まあすぐだな」

そう答えてベンチに座る。ハジメとケイ君が隣に腰を降ろした。
バス停でもバスの中でも、それ以上会話はなかつた。

その7（後書き）

事前にルールブックで勉強する人は真面目、勉強どころかルールブックすら持つてないのはハジメ。

目的地の会場の門を抜けた。やつと着いたか。

「そういや、何で会場が小学校なの？ オレら高校生なんだし、普通は市かどうかの体育館じゃないの？」

「え？ だつて出場者」

校門に乗り入れた赤のスポーツカーがオレ達のすぐ横に止まった。

「あんた達今着いたの？」

乗っていたのは三神先生だった。スーツを着てはいるが、上着を助手席に放り、着崩している。

「中嶋は？」

「まだ来てないっす」

「あいつやっぱ使えないわー」

「あいつ使えないんすよー」

「生徒を使えない言づなよ、しかもやつぱつて……。」

「じゃあ先体育館入つてて」

車のウインドウを閉め、三神先生は駐車場田指して車を進めた。直接体育館の入り口から入り、体育館フロアを覗くと、

「おいハジメ、子供ばっかだぞ！」

「だから、みんな選手だつて」

ハジメが鞄から大会の概要が書かれたプリントを取り出し、手渡してきた。取り上げてよく見ると、出場者欄にはジュニアからシー アまでと書かれていた。

「ほら見てみ、子供だけじゃないし」

「じつちゃんばっちゃんがちらほらいるのを、なにがほらだつ

「ちらほらつてなんだよ、お前こそ年寄つくなじ葉つかいやがつて。はつはつはつ

「笑つてんじやねえ！」

もう一度会場を見渡す。

「他の高校はどこだよ？」
ハジメが会場を見渡す。

「そういうじゃないな」

「えと、地域の学区からして、ぼくらの他に出場してそうなのは他に一校だけじゃないかな？」

「一校だけ？ しかもいないつぽいし」

拡声器独特のでかくてかすれた声がした。

「開会式を始めますので、練習をやめて下さい」
選手がみんな球を打つのをやめ、ステージ付近の台をどかし始めた。

「お前らさつさと着替えなくていいのか？」

後ろから三神先生に声をかけられた。オレ達は荷物を会場の隅に放置し、オレは中学時の卓球用ウェアに、ハジメとケイ君は高校の体育授業用の短パン半袖に着替えた。なんだこのもやもや感は……。

開会式は開会の言葉で始まり、ルール説明、施設の使用について諸注意など、簡素なものだつた。整列しても子供や老人しかいない。最後に、団体戦用のメンバー表を受け取りに来るよう言い渡され、ハジメがそれに向かつた。

開会式も終わり、体育館の隅に放置していた荷物の元へ戻つた。他の出場者もフロアの片隅に場所をとつてている。

「ケイ君、返信きた？」

中嶋から返事がきたか訊いてみるが、メールは返つてきていらないらしい。

「じゃあ団体は三人で出場だな」

用紙をして戻つてきたハジメがそう言つた。

「三人でも出れるつて？」

「おう、おっちゃんがいいよって言つてくれた」

「じゃああとは組み合わせだな」

今回の団体戦は初戦にシングル、次にダブルス、しめにまたシングルという流れだ。予定では先発のシングルにハジメ、次のダブル

スにケイ君と中嶋、最後にオレのはずだった。が、中嶋の欠場により……。

その8（後書き）

次から大会開始！

「したら、気張つて行つて来い！」

「先生、相手小学生つすよ？」

「へえ～。言うじやないの」

三神先生の意味深な発言と含み笑いに、ハジメは不可解な恐怖を感じてぶるつと体を震わせた。

「ハジメ君、はやくつ」

ケイ君にせかされ、ハジメが卓球台前に並んでいたオレ達に加わった。相手チームはとっくに整列していた。相手チームの一人が息を吸い込み、号令をかける。

「きをつけ、れい！」

「――お願いしまーす」「――」

相手の代表と対戦表を交換した。団体戦では通常、自チームの選手がどういう順番で出るかを対戦表に記し、試合を始める前にそれを相手チームと交換することになっている。相手の出方次第で選手を変えるのを防ぐためだ。まず最初は、予定どおりハジメに行かせることにした。

相手にラリーを頼まれ、少し緊張しながら返事をするハジメ。するとハジメは小学生の球出しをフォアハンドで、思い切り振り抜いた。相手の顔面にヒット、主審のオレは引きつった表情で見ていた。ハジメがすぐ謝る。

「「、ごめん！」

ピンポン球を持ち直した小学生がハジメを見下す目で、

「お前、下手だな」

「……もう始めようか、クソガキ」

小学生の挑発に乗るなバカ！

選手互いにラケットを交換し、確認する。試合前に相手のラケットを確認する恒例の作業も、知識のないハジメには意味がないだろ

う。

ハジメは卓球経験が浅い。一週間前に始めたばかりの、ラケットの握り方しか知らないような人間だ。そんなド素人が、吸収の早い幼い頃から練習を積んでいる人間と対戦だなんて、無謀すぎる。構えからして違う。相手は体に刻み込まれたかのような慣れを感じるが、ハジメの構えはどこかたどたどしい。

「ラブオール」

ハジメがストレートのサーブを打つ。相手は序盤から力強くスマッシュを打つてきた。田すら球に追いつかず固まるハジメ。

「ラブワン」

カウントで我に返る。だが付け焼刃のサーブでは、この状況を開などできない。

ハジメのサーブのたびに、サーブ、スマッシュを繰り返し、一セツト目が終わつた。審判である以上アドバイスはできないのだが、元より助言したつて……。

だが少しずつ、ハジメがスマッシュ球に追いついて、きた? というか、やけになつて手をのばしてるというか……。ハジメの目がすわつてゐる。

マッチポイント、予想どおり相手のスマッシュ。が、ハジメのラケットがついに球に当たつた。だが球は台を大きく越えて飛んでいつつてしまつた。

試合終了。ハジメは礼をしてしょんぼり帰つてきた。

「ハジメ君、元気出して。最後おしかつたよ!」

「ケイ君……」

若干目が潤んでいるハジメ。ケイ君の優しさに心動いたのか、はたまた負けたことが相当ショックだつたのか……。

「アツハツハツ、一点も取れてないでやんのー!」

そして茶々を入れる教師。なんて大人だ、指をさすな指を。

その9（後書き）

子供って背が基本低いから、大人じゃスマッシュ打たないだろ？高さでスマッシュ打てちゃうことが多いあるんですねー。自分の持っているもの全て武器にしてしまうとはなんとたくましいことやら。

「試合前のダブルスは、オレとケイ君との即席コンビで挑む」となった。

試合前のラリー。出された球をオレが軽く返球する。相手もフォアハンドが打ちやすい位置に返球してくる。ケイ君の番。が、ラケットが届かず、空振り。ラリー一球目もケイ君が打ち擣じて止まつた。練習期間が一週間しかなかったといえど、昨日はまともに打っていたのに。緊張か？

「ケイ君、落ち着いていい。楽しくね」

「う、うん」

卓球のダブルスはテニスなどと違い、打つ順番を交互に変える決まりがある。オレが打ち、相手が返球してたら、次はオレではなくケイ君が打ち返さなきやいけない。どれだけオレの番で終わらせられるかが今回の課題だらう。

小学生相手とはいえ、久々の試合に少し興奮しているのが自分でも分かつた。

サーブ一発目、左に回転を思い切りかける、相手は空振り。先制点をゲット。サーブする位置が変わり、二球目。サーブの位置がずれることにより、レシーブする相手も変わる。ここはどちらがいいのか？

同じサーブを放ると、レシーバーの球はネットに引っかかった。この下には十分通用するな。

サーブ権が移り、相手のサーブ。当然のように回転をかけてくる。ケイ君のレシーブがネットにかかった。ケイ君にはフォアハンドとバックハンドをかなり手短に教えただけだ、当然そうなる。

「じめん、コウヤ君……」

申し訳なさそうに謝るケイ君。

「いいよ、気にしないで。な？」

励ませど、ケイ君は顔を落ち込ませたまま。

続いてオレがレシーブ。ケイ君に打順が回る前に終わらせるつもりできわどいコースを狙うが、相手が俊敏に反応。即席コンビと違ってダブルス慣れしている。球はオレ寄りに向かって返ってくるが、さほど勢いはない。ケイ君せめて追いつけ！

球が台の上を一度はねると、そのままフロアへと落ちていった。ケイ君に田をやると、球から遠く離れた場所から必死に手だけ伸ばしていた。

「「ごめんね……」

「あー、わかったぞ。

「ケイ君、ちょっと」

「え？」

「もっと球に近づいていいんだよ？」

「う、うん……」

「ケイ君、遠慮してちゃダメだからね？ オレにぶつかるんじゃないからくらい動いてでも球を打つんだよ？」

「うん、ごめんね……」

「まいっただな……」

「……あちゃあ」

「まあ、今のはしゃーないだろ、慣れてないんだし」

「そりなんですけど……」

「……あ、また」

「練習の時はまともに打ててたんですけどねー」

「ふーん」

「あがつてるのかな？」

「……てかさ」

「なんです先生？」

「橋本のサーブの構えって、なんかカマキリっぽくね？」

「ええ？ ユウヤ普通に打つてますよ？」

「いやなんかさ、動きが本格的すぎるというか

「あー、回転かける時のラケットとか、言われりゃそんな気も……」「だろ?」

「それ言われたら他の人とかもみんなカマキリに見えちやうんすけど。キモチわるい」

「うつひやつひやつ、みんなカマキリとか、やばい、私も、ククッ！ じいちゃんばあちゃんのカマキリ特に強烈だなー。」

「もー最悪だわー」

ケイ君をカバーできず、ダブルスは敗北。この時点で一回戦敗退が決定した。

「足引つ張つてごめんね」

「もつと積極的にいかなきや」

「うん、ごめん……」

うつむくケイ君。

「まあ、時間なかつたんだから、しおりがないか。てか、何より中嶋が悪い」

ケイ君のトラウマにならないうつに慰めた。

「そういや、なかちんから返事きた人いる？」

みんなが携帯電話を確認する。

「あ、メール來てた」

オレの携帯がメールを受信していた。携帯のディスプレイには、寝坊した！ の文字と涙の絵文字が写っている。さつさと来いと返信して携帯をしました。

午後の個人戦までだいぶ時間が空く。邪魔になるため練習もできず、他の試合を観戦する。

「ケイ君、あそここの試合すゞよ。めつちや打ち合つてる」「うわあ、ほんとだ」

「ハジメ、お前も見てみ。見るのも練習になるからフロアに全身を伸ばしてだらけながら、

「やだ、みんなカマキリなんだもん」

一体なにを言つてゐるんだか……。

その10（後書き）

プレイそのものに性格が現れるものです。私はダブルス時にパートナーにラケットをぶつけたことがあります。がさつですんません、でも反省はしない。

マナーモードにしていたオレの携帯が振動した。中嶋からの電話だ。

「もしもし?」

「おおコウヤ、今電車降りたんだけど」

「お前なに遅れてんだよ、何かあった?」

「いや寝坊」

初の大会で寝坊だあ?

「でさ、今から会場にどうやって行くの? 何行きのバスつか

」

「誰から電話?」

ハジメがきょとんとした顔を向ける。

「知らん」

明らかにむすっとした表情で返答すると、ハジメは言葉を詰まらせた。すぐハジメの携帯が振動し、ハジメが電話に出た。

ダメだ、ここでイライラしても始まらん。結成したばっかなんだ、統一性とかはとにかく無視だ。つたぐ、やっぱ一人の方がらくだ。

「おい、コウヤー? おーい?」

ずつと声をかけられていたらしい、気づかなかつた。

「飯買ひに行こ? ザー?」

「お、おう

オレらが会場の端で弁当をつづいてたその時、中嶋が遅れてやつてきた。

「わりー、寝坊しちまつた」

ハジメとケイ君が顔をほほりぱせて中嶋を迎える。

「まあ朝早かつたしなー」

「良かつた、個人戦には間に合うよ中嶋君」

「おつ、まじか。てか腹減ったよ」

個人戦に間に合えばオッケイなのか？ 心配させといて、腹減つただと？」

「中嶋、お前どういう神経してるんだ」

オレの堪忍袋が切れる寸前に、オレのじやない声が低く、静かな怒りとして吐き出された。三神先生だった。

「お前のせいで他のメンバーは練習すらできずに、予定外の組み合わせで試合に出たんだぞ？ どれだけ迷惑かけたと思つてるんだ」場が静まり返つた。三神先生が先生らしいことを言つてゐる……。

「……すいませんでした」

中嶋がオレ達全員に向かつて頭を下げた。ハジメとケイ君が、中嶋に優しくフォローした。

三神先生と目が合つと、先生はにかつと笑つた。テキトーなふりして、周りのこと見てるのか、この人……？

「先生、さつきの教師っぽかつたつすね」

ハジメがオレと同じ感想を口にした。

「戸田君、君は先生に喧嘩を売つてるのかな？」

三神先生は微笑むものの、目が笑つてなかつた。

中嶋が駆け足で弁当を買ってきて、胃に詰め込む。ちょうど団体の決勝戦が終わり、個人戦へ移つた。アナウンスが流れ、代表者がトーナメント表を取りに行く。

全員に表が渡され、オレも目を通す。といつても、誰が誰だが分からんし、いまいちピンとこねえ。各々がもやもやした表情をする中、ただ一人、ケイ君だけは畏怖するように震えていた。

「ユウヤ君、どうしよう……。ぼくの相手、団体戦の優勝チームの人……」

団体の決勝戦は、小学校高学年らしきチームと、二十歳前後のお兄さん一人とおじいちゃん一人が合わさつた異色の大人チームの試合だつた。小学生チームも決して弱くはなかつたが、圧倒的な大人

チームの強さにストレート負けしていた。大人気ないと見るか、スポートマンらしい全力な試合だったと見るか……。ケイ君の相手は、その大人チームの内の一人のおじいちゃんだ。

「まあ冷静になれよ、ケイ君」

ハジメが話に入ってきた。

「どうせ相手が誰だろ」と勝てやしねえんだから、思いつきりやり

やいんだよ

「なんちゅう意見だボケエ！」

「まあそのとおりだからな、相手の胸を借りるつもりで行つて来い

!

三神先生まで余計なこと言いやがつて！ 台に向かうケイ君の背

「でかーじょ、お前の辯論が何がいいんだ？」

... בְּנֵי עַמּוֹת וְבְנֵי עַמּוֹת

トーナメント表に目を落とす。あれ、これつてもしかして……。

負かした小学生が立っていた。

!

戸田、落ち着け！ 濡く散つて来い！」

「先生さりきから余計なことしか言ってねえ！」

ハジメの試合は団体戦のリプレイを見ているように、あつけなく

終わつた。

その11（後書き）

遅刻なんて一番やつてはいけませんよね。寝坊したり一度寝したりバスに乗り遅れたり……「めんなさい。

「さて、そろそろ帰るかー」
ハジメが制服を広げ、着替え始めようとしていた。
「いやいや、オレの試合まだ残ってるから」
準備運動しながらハジメに答える。

「…………ハハツ」

そして黙るハジメ。

「…………なんだ今の反応？ 関心なさすぎるだろー。」
、やはり見ぬや、

着替え続けてんじやねえ！」

「ケイ君、帰りにツタヤ寄つてかね？」

「ツタヤ行くなああああああああああ！」

試合する前から息切れを起こすほど叫んだ。

「うつさいなー、だつておれもケイ君もなかちんも試合終わつたし
ー。もうすたぼろだつたしー」

「ハジメ君、ユウヤ君の試合の応援しなきゃ」

ケイ君は思いの外朗らかだった。といつのも、対戦相手とあまり
にも実力差があつたために、相手のおじいちゃんが熱心に指導して
くれたそうだ。

「すゞかつたんだよ、少し打つただけでどこが悪いか見抜いてくれ
て！ でね、教えてもらつたとおりにしたら球が狙いどおりにね

」

試合に負けてこんなに明るくなるのも珍しい。まあ、あの一戦で
何かつかんだなら儲けもんだろつ。

「そういうや中島の試合は？ オレ、ケイ君の試合見てたから分から
ないんだけど」

「ああ、俺？ いやー、負けちつたわ」

「ちっちゃい小学生相手にストレート負けだつたな」
ハジメがからかうように付け加えた。

「小学生マジつええ」

「そつか。訊いといてなんだが、どうでもよかつたわ」

「少しほ歯に衣着せようぜ?」

ハジメが珍しく良心的な言葉を返した。

小学生を叩き潰すことに罪悪感があるかと訊かれたら、そりや少し良心が痛むんだけど、一応年上だしオレも経験者だし、面白いようには点が取れた。

審判の号令と共に、相手に礼をする。まあ楽勝だつたな。

「ユウヤ君す」「一回戦突破だね」

「いや、すごくないつて。前からやつてりや」「んくらいはな」

相手が相手な分、天狗にもなれない。

「え、まだ帰んないの?」

鞄を肩から吊るした制服姿のハジメがそっぽやいた。むかついたから室内シユーズで蹴り飛ばしてやつた。

「次の相手は誰だ?」

同じく制服姿の中嶋が訊いてきた。「いつも着替えてやがる。

「多分、あの人」

視線を向ける。その先には、若い男が一人。

「あの人つて、団体戦で優勝したチームの人じやん」

おじいちゃんに混じつてた、大学生くらいに見える青年。茶髪で若干ガラが悪く見え、近寄りがたい雰囲気を感じる。

「おいユウヤ、卓球やってる人つてもつとおとなしい人ばっかじやねえのか?」

「んなもん偏見だろ」

小学生よりか骨がありそうな相手だ。

他の試合が次々と終わり、ようやくオレの二回戦が始まる。すぐに台に行き、打てる準備をする。相手は落ち着いた足取りで台につけた。

「よろしくおねがいします」

挨拶すると向こうは、

「よひしぐー」

と砕けた態度で返してきた。

試合前のラリーを始める。軽く球出し。向こうも普通に打ち返してくる。返ってきた球を、相手に打ちやすい位置へ向け、フォアで返球。すると相手は突然、右手を背中にまわし、己の左側の球を右手で打ち返してきやがつた。驚きつつ、普通にそれを打ち返す。向こうは球を受ける度に機敏にフォア打ちと背面打ちを切り替えてきた。この野郎、遊んでやがる……！

ラリーを終わらせ、ラケットを交換。相手はシェイクハンド。どちられどれ。若干重いな。げつ、このハイテンションラバー扱い難しくないのか？思つたとおり熟練者だな。ラバーからしてドライブ主戦型と見た。お、このパワー・テープ、オレが前使つてたやつだ……。「あいつ、相手のラケット見る度に目が怪しくなつてないか？」「先生もそう思います？なんかぎらついて怖いです」

試合開始。相手が高々と球を上空に上げる。落下する球目掛けて、回転をかける。それをツツツキで返そうとするが、ネットにかかりた。もう一度サーブを受けるが、同じくネットに引っかかり失点。回転が読めねえ！

オレにサーブ権が移る。台の端ぎりぎりに打ち込む。が、野郎はまた背面打ちで返してきた。しかも球が速い、追いつかずには通り過ぎた。うぜえ。なにがうざじつて、ふざけてるくせにめちゃくちゃ上手いことがだ。今度は右手左手と交互にラケットを持ち替えながら打つてきた。どっちでも同じくらい球に勢いがある。なんだんだこいつ、大道芸師かなんかか？

「なんだかあの試合楽しそうだな」

「いやなかちん、コウヤの顔が明らかに引きつってるぞ？」

バスを待つ。その間にハジメがしゃべくるが、話の内容が全く耳に入つてこない。

「てか腹減ったー、サイゼでも行かね？」

「俺クーポンあるよ」

「え、でも帰りに寄り道しちゃだめなんじゃ……」

「……け……た……」

「ケイ君真面目すぎるだろ、高校生になつたら買い食い寄り道当た
り前っしょ」

「もしかしてサイゼ初めて？」

「ファミリーレストランだよね？ あまりそういうの行ったこと
なくて……」

「……ま……け……」

「まじかー！ そうだ、今度みんなでカラオケでも行かね？」

「ええっ、ぼく無理だよ、歌えないよお」

「いいからいいから、そういうのも経験だつて」

「う、う、うがあああああ！ あんなのに、あんなのに負けたああ
あああああ！」

「う、ユウヤ？ おい落ち着け！ なんだ、カラオケがいやなのか
？ ならボウリングでもいいんだぞ？」

「ええっ、ボウリング投げれないよお」

「うぐがああああああああああああああ！」

その12（後書き）

今回ユウヤが試合した相手、実はモデルがいまして、本当に背面打ちや打ち手の切り替えなんてテクニカルな遊び打ちをする人がいました、あくまで試合前のラリーででしたが。実力のある人間は、遊び方もまた常人離れしてますね。

季節は六月の初夏へと移りつつしていた。気温は上昇する一方で、そろそろブレザーが鬱陶しくなってきた。ネクタイを緩めてワイシャツのボタンを第二まで開けて、身なりの通気性をあげる。だらしないままの格好で廊下を歩いていると、三神先生にその場で呼び止められ、他の教師には見つかるなよとたしなめられた。そのまま歩き続け、部室として使っている教室のドアを開く。卓球台の横で、ケイ君が素振りをしていた。素振りをやめて振り返るケイ君。

「あっ、ユウヤ君！」

「相変わらず早いなー」

鞄を端に置き、その場に座り込んだ。体勢を崩し、ケイ君を見上げる。

「早く練習したくて」

「そつか」

「ハジメ君は一緒じゃないの？」

「ああ、ホームルーム終わつたらいつの間にかいなくなつててな。まだ来てないのか」

心配そうな顔をするケイ君。

「それよりちょっと素振りしてみてよ」

ケイ君が素直にその場でラケットを振る。もう違和感もなく、形になつてている。

「いいね、さまになつてきたじゃん」

ケイ君がにかつと笑つた。いつも子が男女関わらず人に好かれんんだろうな。

「じゃあラリーするか。せつかくケイ君もラケット買つたんだし」

「うん、打とうー。」

ケイ君同様にオレも体育授業用の短パン半袖に着替え、ラケットの準備を済ませてからラリーを始めた。部室のドアを開く者はおら

ず、オレとケイ君の一人きり。遂にハジメも来なくなつたか。

ピンポン同好会初の大会は、団体戦と個人戦共々あつけなく負ける有様だつた。まあ初心者の寄せ集めなんだから、当然の結果だろう。だがそれ以降のうちはひどい。ただでさえ少人数だというのに中嶋の不参加が目立つようになり、今日に至つてはハジメまでも部活をさぼつたようだ。

「ケイ君はさ、部活辞めようとか思わないの？」

ラリー中にそう問い合わせた。ケイ君が打ち擣じ、慌てて球を拾い上げた。

「……思わない、かな？」

「……ふーん」

ラリーを再開した。集中してなのか気まずくなつたからなのか、ケイ君は黙々と打ち返してくる。

練習を切り上げ、一人で帰ることにした。

「なあ、ちょっと飯いかない？」

校門を出てからケイ君にそう提案した。

「ダメだよ、寄り道しないで帰らなきや」

「とか言つて、試合のあとみんなでファミレス行つたじゃん。ケイ君一番興奮してたくせにー」

「だつて、楽しかつたんだもん……」

「だろ？ いこいこ、オレ新発売の食べたいんだよ」

バスには乗らずに歩いていく。学校から歩いて十五分ほどにハンバーガーショップがある。うちら学生のたまり場と化したそこは、学制服だらけだつた。

「ケイ君はなに頼む？」

列に並びながら壁に貼られたメニューを見る。どうしようかなど、ケイ君は悩んでいた。

「あれ、ケイ君？」

後ろから声をかけられた。聞き覚えのある声。

「あー！ 寄り道いけないんだーー！」

「「」、「」めんなさい！」

「ケイ君、こいつも寄り道してるから……。ハジメ、なにしてんだよ？」

「こんなところで寿司でも頼むと思つか？」

「相変わらずひょうひょうと答えてくる。

「そりじゃなくて、今日練習来なかつただろ？」

「ああー、まあそりだな……。とりあえず一緒に食つか

オレとケイ君は注文を済ませ、順番が回つてきたハジメに、

「ハジメ、向こうの席いつつか？」

「オッケー」

座つて待つことにした。

「えつと、チーズバーガーのセットで飲み物コーラ、あとお姉さんのスマイル一つ」

足早に席へ向かつた。

ハジメはコーラとポテトと番号の書かれた札を載せたトレイを持って席に来た。ハンバーガーはでき次第運ばれてくるらしい。

「で、卓球はどうすんだよ？」

单刀直入に訊いた。

「え？ 続けるよ」

「じゃあ練習来いよ、もう飽きて辞めるつもりかと思つただろ？」

オレとハジメが話す傍ら、ケイ君は長いポテトを端から小刻みに噛み進めている。リスみたい。

「最近、なかちん来なくなつたじやん？」

ハジメが真面目なつらで話を続ける。

「おれなりにちょっと探り入れてたんだよ。なかちんと仲良い友達に話聞いてみたりして」

「さぼつて何してるか調べてたつてこと？」

「人のプライバシーを暴くなんて褒められたことじやないけどな。メールも電話も返してこねえし、直接会うのも避けてるみたいだか

卷之三

「お待たせしました、番号札二番のお客様！」

オレの言葉を、ハンバー ガーを持つてきただ店員が遮った。視線を下げ、話すのを一旦やめた。

「あ、中嶋君」

十一

ケイ君が目を見開きながらそう言つた。ケイ君の言葉に一いつれて店員の方を見る。店の制服を着た中嶋が立つていた。

「なんだ、お前らかよ」

中嶋君: でバイトしてるんだ、カツ「いい」

ケイ君の感覚が良く分からぬ……

そんした
な

何事もなかつたようにハンバーガーを手渡し、去ろうとした中嶋をオレが呼び止める。

「おい中島、バイトするならさすがにちやんと頼むよな」

おお 悪い 一々言わせて詰詰出れないから あつさらかと二答える中鳥。

「曲田ジノリナリセニテ」

「いや、遊んだりもしたいしさー。バイトの子がみんなかわいくて、がたつ！」

「おい、なかちん！」

ハジメが席を立ち、大声を上げた。こんなに熱くなるハジメを今

まで見たことがなし

!

のくそつたれが！

がたつ！

「二人とも不純だよつ！」

ケイ君が立ち上がり、店から飛び出してしまった。

「おい待てよケイ君！」

がたつ！

「中嶋君、今の話なによー！」

店の制服姿の女の子がカウンターから飛び出し、中嶋に怒鳴りつけた。

「私と付き合つんじやなかつたの？」

「みさ子ちゃん落ち着いて、これは違つ

「言ひ訳しないでよー！」

ビンタの音が店中に響いた。

「うわあああああああん！ 中嶋君のばかあ！」

みさ子と呼ばれた女の子が泣きながら外へ出て行つた。

「お前ら全員めんどくせえええええ！」

その13（後書き）

中鶴あみあ
W W W W

学生の帰宅ラッシュが過ぎたおかげでバスはがら空きで、オレとハジメは最後部の座席に座った。

「ケイ君まじで帰っちゃったんだなー」

「お前が変な」と言ひ出すからだる。呆れてもう来なくなつたらどうするんだよ?」

ハジメは腕を上へ伸ばしながら、

「平氣平氣。あの子何氣に意思固こよきつと

つたく、無責任といふかマイペースといふか……。

「とりあえず月曜からまた練習出るんだる?」

今日は金曜日だから、来週の月曜日まで学校は休みだ。

「もひ」

「じゃあそれはいいとして、中嶋はどうするよ? あこひこそ来る気ないぞ」

「ないな」

今度は背もたれに埋もれるよつに寄りかかり、顔を天井に向けるハジメ。

「まあいいんじゃね? 出たくないなら出ないで。ながちんの時間しばれねえよ」

「……そつか」

やりたくない奴に無理矢理やらせても仕方ないのは分かるが、ハジメほど柔軟に対応なんてできない。こいつははづれてるんじゃなくて、無駄に力んでないんだうつな。

「コウヤこそ良かったのか?」

「巻き込んだって今更かよ?」

「とか何とか言つて、本当は卓球したかつたんだろ?」「べつにー。ただ他に入りたい部もなかつたし」

「またまたー。素直になつちゃいなよー」

演技くせえ喋り方しやがつて。

バスは終点の駅に着き、そこで降りる。二人とも同じ電車に乗り込んだ。

「そりいやお前まだラケット持つてなかつたよな？ そろそろ買つか

「ラケットつていぐらくらいすんの？」

「ピンきりだけどファーストだし、まず板の部分で五千円くらいだろ、それにラバーも一枚三、四千円くらいか。ショイクだから当然ラバーは一枚必要」

「計一万三千円も？」

「単純計算でそんくらい。あと接着剤とかクリーナーとかもいるな」

「たっけえよ」

「金ないの？」

「ちょっとハンバー ガー屋でバイトを……」

「お前、金よりも女の子田道で通つつもりだろ？」

「ありや冗談だつての」

周りに迷惑にならない程度に語氣を強めるハジメ。

「そうかそうか、お前はアヤ一筋だもんなー」

からかうように言つてみせた。

「うぎゃー、うつさいわ」

珍しくうろたえる姿に、つい声を出して笑つてしまつた。

「なつ、笑うなつて」

「いやー わりい」

「てか、コウヤはアヤちゃんと知り合いなんだろ？ 彼氏とかいるの？ タイプとかは？」

「知らねえよ、もうずいぶん喋つてねえし

「いーじやん教えるよー、協力しろよー」

電車が駅で止まつた。

「今度ラケット買いに行くからな」

じゃあと片手を上げてオレ一人電車を降りた。

「けちー！」

ドアの閉まる間際、ハジメの幼稚な悪口がかるびづじて聞こえた。

部室のドアを開けると、相変わらずケイ君が一人素振りをしていた。振り返ったケイ君に向かつて、オレの隣にいたハジメが頭を下げた。

「この前はさぼっちまつてすまん」

「ううん、いいよ。事情があつたんだし」

「いやー、申し訳ねえ。今度サボるときは前もって連絡する」

「サボること自体許されるわけがねえ。バカ言つてないで練習するぞ」

「ちやつちやと着替えるか」

体操着に着替え、ハジメが鞄から平べつたいケースを取り出した。

「シャキーン！」

ケースからラケットを取り出し、高く掲げるハジメ。

「ハジメ君もラケット買ったんだ！」

「おう、コウヤに見繕つてもらつた！ 早速球打とうぜ！」

「とりあえず素振りからだ」

「けちー！」

その14（後書き）

ラケットって意外にお金がかかるんですよ。でもその分愛着も沸きます、ファーストならなおさらです。映画「ピンポン」でラケットを焼却炉に入れるシーンは、号泣こそしないものの、胸が痛くなるほど悲しいシーンです。

平日は全て授業と部活に追われるようになり、気づけば七月、とつぶに半袖と夏用ズボンで過ごす時期となっていた。今日もホームルームが終わり、いつもどおりハジメと一緒に部室に向かうと、部室の前でケイ君がドアガラスから中を覗き込んでいた。

「なにしてんの？」

「あつ、えつと！ えつと！」

「ケイ君なんでてんぱってんだよ？」

「…」

「…」

「…」

「…」

アヤがいた。

その場に座り、マンガ雑誌を床に置いたまま開いている。あれは多分、ハジメが置きっぱなしにしていたものだらう。何故マンガを読んでいるとかそういうじゃない。

「なんでお前がいるんだよ？」

オレの声に反応してアヤが振り向いた。ハジメは石のようにも固まり、ケイ君は未だドアに隠れて姿を現そうとしなかった。

「…」

「…」

「…」

「…」

淡々と答えられ、アヤの真意が読み取れない。質問を続ける。

「で、なんか用か？」

「…」

「…」

「…」

オレの質問は無視かよ。

「同好会創つたくらいだしな」

「そうだよね」

「……なんかあつた？」

アヤは視線を合わせないで「別に」とだけ答えた。オレもアヤもだんまりを続けていると、ハジメが部室に入ってきた。

「あ、あの、お、お、おれ、おれれれ
緊張しすぎてなに言つてるかさつぱりだ。」

「アヤ、こいつの名前知つてたつけ？ 戸田初つつて、うちの部長。前に打つたの覚えてるか？」

アヤがハジメの方を向いた。視線に気づき、とっせにうつむくハジメ。

「……ハイジ君？」

「違う、ハジメだ」

ほとんど覚えられてないことが判明し、ハジメは明らかに落胆した。かわいそうな奴。あつ、そうだ。

「今日はもう部活出るつもりないんだろ？ 軽く試合してかね？」
普通ではありえない提案だが、物は試し、言つだけならタダだ。

「……いいけど」

了解してくれた。

「よし。そんじゃハジメ、さつさと準備しろ」

急に振られて飛び跳ねるほど驚くハジメ。

「はあ？ なんでおれなんだよ！」

「どんだけ成長したか分かりやすいだろ？ ほら、アヤが待つてるぞ」

「てめえ殺す！ 絶対殺す！」

二人が手短にラリーを済ませ、本人は不本意そうだが、ハジメのリベンジ戦が開始された。

「ラブオール」

審判はケイ君にしてもうつことにした。これも練習だし、いざとなつたらオレが補助する。オレは一人の試合をじっくり見させても

らうこととした。

まずはアヤがサーブを打つ。以前同様、キレの良い横回転をかけてくる。ハジメはツツツキでレシーブしようとするが、回転を読み間違え、ネットにかかる。一球目も同じサーブに引っかかった。

次はハジメのサーブ。バックサーブ（バックハンド側からサーブを打つこと）の構えをし、下回転をかけつつ打つハジメ。アヤがツツキで返球した。ハジメも同じように返す。ツツキの応酬。ハジメは何だかんだで器用な奴だ。ただつなげるのではなく、時には奥へ、時には浅い位置へ、不規則に打ち分けている。事実、ツツキに関してはケイ君より覚えは早かつた。攻撃したくてもできないアヤはさぞもどかしいだろう。ツツキ戦はハジメが制した。

ハジメ一回目のサーブも同じく下回転。ハジメはまだ下回転のバックサーブと、フォアサーブ（フォアハンド側からサーブを打つこと）のストレートしか覚えていない。どれだけ一つのサーブで持ちこたえられるか……。アヤがツツキではなく真逆の上回転、いわゆるドライブで打ち返した。元々かかっている回転以上に真逆の回転をかければ、相手に合わせずにはなり打ち返せる。決められると思いきや、ハジメはなんとか追い付き、球を打ち返した。だがアヤは動じず、ハジメの真逆の位置へ打ち、さすがにこれには追い付けなかつた。あのレシーブを返したんだ、十分なくらいだ。

試合は進むにつれ、アヤに主導権が移つていった。場慣れしているのもあり、ハジメの癖や弱点を把握するのにそう時間はかかるなかつたようだ。

ハジメのバックサーブの構え。もうアヤには下回転が来るとばれている。もつと時間があればサーブのレパートリーも増やしてやれるのに……。サーブトスをする。トスの構えからしてバックサーブを打つと思いきや、ハジメは即座に体の位置を変え、フォアサーブを打ち込んだ。バックサーブの下回転が来ると身構えていたアヤはわずかに反応が遅れ、レシーブ仕損じた。アヤが驚きつつ、球を拾い上げる。一番驚いているのはオレだ。あんなサーブ、教えてない。

限られたレパートリーからつくりあげた、ハジメのサーブ。笑いながら、少し感心した。

健闘したものの、惜しかったのは初めの一セット目だけで、あとはあっさりと叩き伏せられるハジメだった。

「コウヤのばかあ！ 勝てる訳ないだろ？」

「何言つてんだよ、そんなの最初から分かってるから」

「恥かかせんなよ！」

アヤがラケットをしまいながら、

「でも、強くなつてたよ？」

アヤの言葉に慌てるハジメ。

「えつ、うえ？ ほんと？」

「うん、前は打ててなかつたし……」

無意識に吐き出される毒にハジメが侵されていく。不憫な奴。

アヤと視線が合つた。

「あのや」

アヤの方から声をかけてきた。

「ん？」

かと思いきや、またうつむいてしまつた。

「……なんでもない」

何か言う手前で、やめてしまつた。

「……お前さ」

オレ自身が自分から言いかけて、少しの間黙つてしまつた。言葉を搜す。アヤが見上げていてるのが分かつた。

「しんどい時は、しんどいって言えよ？ 誰でもいいから」

「……なに、それ？」

またアヤと目が合つと、次にアヤが小さく笑つた。無性に恥ずかしくなつた。

「なにじやねえよつ。もういい、何でもねえ」

「そつか……ありがと」

じゃあねと、アヤは部室から出でていった。

「何しに来たんだろうね？」

「……あなた」

なんとなく分かっていた。だけどあいつは、逃げ出でようとする寸前で踏みとどまつたみたいだ。

「おうお前ら、やつてつか？」

騒々しくドアの音をたてながら、入れ違つてひたすら神先生がやつてきた。

「あれ、先生珍しいですね」

「ふつふつふつ、私が何の用もなしに来ると思つか？」

「はい、暇そですし」

先生がハジメのほっぺをつねつた。

「ちょっと、せんせつ、これ体罰ですー。」

「ああん？」

「いつたい！『ごめんなひやー、ゆるひー！』

上に持ち上げられてつま先立ちしながらひたすら謝るハジメ。

「次の大会が決まつたぞ、今度は全員高校生だ！」

オレ達全員が感嘆の声をあげた。

「市の大会なんですね？」

前回のこともあるため、細かいところまで確認しておかねば。

「ああ、規模は前以上だな」

「どうしようつ、緊張するな……」

ハジメが意氣揚々と、

「ようし、大会に向けて特訓するぞー！ タダヘダッショだー。」

「くさつ」

ケイ君がプリントをまじまじと見てから、気まずい声を出す。

「あの、中嶋君は出でてくれるかな？」

少し間を空けてから、

「普段練習してないんだから出ないだろ」

冷たい氣もするが、オレの考えをそのまま言つと、ケイ君は落ち

込むように田を伏せた。

「まあやる気ないならじょうがないんじゃね？」

ハジメも同意見のようだ。

「三人でがんばろうぜ。一つでも勝ち星をあげるのが、あいつへの
はなむけになるんだよ。あいつの仇は、おれ達できつと……！」
「死んだみたいな言い方すんな」

その15（後書き）

学校で読むマンガってなんであんなに面白いんだろう。

私の名前はハジメレラ。試合とこづ名の舞踏会へ参加予定なの。見慣れない道、いつもより早起きした朝。つぶふ、小鳥さんはお歌が上手ね。

ちゃりんこきこきい音をたて、坂道を越える。フルスロットル！ 鞄をかごに押し込めて、もう一つは背中に背負つて。あたしの情熱とアンダルシアは、鞄一つじや收まりきらなかつたみたい。てへつ。

到着したら自分への「じめうび、いがい牛乳買っちゃおう！」

今日はなにやら特別なことが起きそうだね。

少し不安……でも大丈夫、星占いばつちりだつたもん

らんらん気分でちゃりんこ飛ばすの。

見知らぬ道、いつもと違う時の流れ。やだ、もうこんな時間。あたしのばかばか！ ドジなお姫様なんだから。お城に着く前に魔法が解けちゃうぞ！ 急がなきゃ、コウヤお嬢様とケイ子ちゃんが待つてるんですもの。

「道に迷つたああああああああああああああ！」

「あのバカ……」

携帯を切り、そう吐いた。

「コウヤ君、どうしたの？」

「ハジメが迷子になつたらしい」

「ええつ、間に合つの？」

「人に道聞いてどうにか間に合わせるつてよ

オレとケイ君は自転車で市民体育館に着き、館内ロビーで腰掛けていた。

「つたく、なんでもちらは毎回まともに合流できないんだ？」

「仕方ないよ、じつに来ること滅多にないだろうし」

田の前で他校の生徒達が会場に入つてくる。いよいよ大会っぽくなってきたな。ケイ君が口を半開きにして田を見開いている。参加選手の多さに驚いてるよう見えれる。

それは唐突に聞こえた。

「あれ橋本じゃね？」

ぞろぞろと会場入りする集団の中から、オレの苗字が聞こえた。人が来るようになつてからずつと下向いてたのに、オレの名前、なんだよ、やめてくれ、心拍数速くなつてる、どつか行け……！

「どうしたの？ 大丈夫？」

「え？ ああ、うん……」

ケイ君が心配してくれてる。

「おーい！」

入り口からハジメと三神先生がやつてきた。

「わりいわりい、道わからんなくてよー。慌てすぎて一人メルヘンな世界に踏み込みかけたぜ」

「何言つてんだか。これで全員だな。……おい、橋本？」

三神先生がオレの顔を覗き込んできた。

「あつ、はい！」

「ぼけつとすんな、行くぞ」

三神先生を先頭に階段を上がり、通路を歩く。体育館のドアを開けると、ハジメとケイ君が声を漏らした。

「うわ、広つ！」

「すごい、ここでぼくら卓球するの？」

今オレ達のいる二階は観客席となつており、大量の席が並んでいる。囲まれた形で、一階のフロアが見える。もうすでに卓球台が設置され、他校の選手達が練習していた。

「あ、田所先生どこにいます？」

三神先生が携帯電話を取り出して通話し始めた。手短に話を済ませて電話を切つた。

「よし、じつちだ」

三神先生に付いていくと、そこには無精ひげと眼鏡が目立つ男が一人と、大量に置かれた鞄が目に留まった。

「おはようございます、三神先生」

「おはようございます。すみません、予定が少し遅れてしましましたね」

「いえいえ、構いませんよ」

三神先生に倣つてオレ達も男に挨拶した。

「あ、この先生が女子卓球部顧問の田所先生な」

言われて、部活見学の時にアヤをしごいてた人だと思い出した。

「もううちの部員達はフロアで練習しちゃつてますけど、今日いなさそうですね」

田所先生につられてオレ達が下に目をやると、アヤ達女子卓の面々がラリーをしていた。台が空いていようが、正直今は打ちたくない。とりあえずユニフォームに着替えた。

「えへへ、みんな同じじつでいいね」

三人とも同じ新品のユニフォームを着ているのを見て、ケイ君がはにかんだ。

「やつと部活っぽくなつてきたな」

ハジメも嬉しそうに答えた。

「まだ同好会だろ」

「……そうか、まだ部じゃなかつたつけ！」

「……こいつは相変わらずだな……」

オレは席に座り、ケイ君は素振り、ハジメは下で打つアヤを凝視と、各自開会式を待つことにした。

「あ、ケイ君！」

開会式開始のアナウンスが流れ、フロアに下りると早々にケイ君が先輩達に見つかった。

「ケイ君も試合出るの？」

「はい！」

「キヤーー！ がんばってね！」

「ヤ二」、「つるさいわよ」

部長の瀧野先輩に叱咤され、しぶしぶ謝る先輩達。瀧野先輩がこっちを向く。視線が、特にケイ君に対して強い気がするが、未だにオレ達を敵視してゐるのか……？

開会式はおざなりな開会の言葉で始まり、目次どおり進んでいった。途中で選手宣誓が行われ、聞き覚えのある声がしたように思えたが、あえて思い出さないようにした。うつむきながら、自分の意思に反して脳裏をよぎる過去を振り払つた。

開会式が済み、選手たちが二階の観客席に戻つていく。女卓がオレ達の隣で、田所先生と瀧野先輩を中心にミーティングを始めた。それを三神先生がちらつと見た。

「よし、集合！」

三神先生に呼ばれ、全員集まる。

「あー、えつと……今回、初の高校生大会ということで、うん、その、なんというか……特になし、解散つ！」
せめてがんばれくらい言つてくれ。

「ユウヤ」

ハジメが声をかけてきた。

「ん？」

「今回は勝つぞ！」

「……ああ、そうだな。アヤに良いとこ見せないとだもんな
「雰囲気台無しだろそれー」

ハジメをからかうと、少し落ち着いた。

てへつ
＝

今回も以前同様、団体戦、個人戦の順に進められる。団体戦の組み合わせは、一番手にハジメ、次にオレとケイ君のダブルス、最後にオレがシングルで打つことになった。フロアに下り、指定された台の前で整列する。恐る恐る相手チームの面々を盗み見た。知らない奴ばかりだ、胸をなで下ろした。

対戦相手と礼をし、対戦表を交換する。

「そんじゃ、ぱぱつと勝つてくるわ」

ハジメが軽々と口にした。

「ああ、頼んだ。お前の勝敗によって一回戦を突破できるかどうか決まってくるからな。絶対負けるなよ」

「そんなんにフレッシャー与えんなよおー！」

打つて変わつて弱気な発言を残して、ハジメが台についた。台の向こうには眼鏡をかけた氣弱そうな男の子が立っていた。

「よろしくおねがいしやーす！」

「よ、よろしくおねがいします」

ハジメに会わせて礼を返してきた。目が泳いでいる、落ち着きがないな。

ラリーを手短に終わらせ、試合が始まった。

ハジメが下回転サーブを放る。相手はツツツキでレシーブしようとするが、ネットに引っかかかり、あっさりと先制点を取った。二度目も同じバックスピンドル。どうやらあのサーブはものにしたようだな。レシーバーのツツキはまたもネットにぶつかり、球が台の上に転がった。

「すごい、二点連取！」

ケイ君もオレも驚いてるが、一番信じられないといった顔をしているのは本人だった。小学生相手にスコンク（一点も取れずに負けること）かましてたんだ、そりゃ驚くわな。

サーブ権が移り、今度はハジメがレシーバーとなる。相手はハジメ同様、バックスピンのサーブを打ってきた。ハジメお得意のツツキでつなげる。何度か互いにツツキを続けたあとに、相手が打ち損じて失点した。

サーブ、ツツキ、相手のミスの繰り返しで、まさかの三セット

先取。ハジメ初勝利を飾った。

「勝った！ 勝った？ 勝った！」

「興奮しすぎだ」

「ハジメ君すごいよ！ やつたね」

「自分でもびっくり。なんで勝てたのか分かんねえし」

「んなもん、向こうが初心者だからだよ。相手がミスしてばっかだつたろ？ 基礎がまだ固まってないようなド素人。運が良かつたな」「勝ちは勝ちだ、イエーイ！」

前回の大会の方が、全体のレベル自体は高い。というのも、この近辺で高校生を対象にした大会は今年度ではこれが初。今年入学した奴はこれが初出場つてわけだ。出場者の半数近くであろう一年生なんて、高校入学と同時に卓球始めた面子か、良くて中学から続けてやつてますといった連中くらいだ。中学からの経験者はそれなりに手強いだろうが、最近までの部活内の練習メニューなんて、球拾いと素振りくらいで、実践的な練習なんかほんのわずかだつたろうから、めきめきと実力をつけてきたなんてこともないはず。吸収力の高い時期にずっと卓球してる子供と、経験を何重にも積み重ねてきた大人が参加してた前回の大会の方が、全体の質が高いのも当然。ハジメやケイ君ら初心者が勝てるわけなかつたんだ。だが今回は違う。二人ともみつちり練習してきた。少人数だからこそ付きつ切りで教えられた。こんな生半可な奴らに負けるわけがない。

「ゲームセット」

オレのサービスエースでダブルスが終わつた。シングルとダブルスで二連勝したため、一試合目はこれでオレ達の勝ちとなつた。

「ユウヤ君す」い！」

「決めてやつたぜ」

チーム同士礼を交わし、大会本部に結果報告を伝えてから観客席に戻った。

「団体戦初勝利だな。やつたじやん」

三神先生が笑いかけてくれた。

「ま、こんなもんっすよ」

「調子に乗るなハジメ」

一回戦までの間、席について待機することにした。見下ろすと、女卓の試合が見えた。ちょうどアヤが打つていて、どうにか踏ん張つてるみたいだな。

「おいユウヤ、アヤちゃんをガン見か？ 気のないふりしとてそういうことだつたのか？」

「どういうことだつづーの」

「二人とも不純だよつ！」

ケイ君が走り出した。

「ちょ、待て！ ハジメツ、追いかけろ！」

「ケイ君今日は帰っちゃダメえええ！」

一人がかりでどうにか制止させた。

「一回戦始まるっぽいぞ」

「もうそんな時間か」

本部の指示どおりに台へ向かう。タイミング良く相手チームも到着したようだ。ふつと、田をやつた。

目が合つた。見覚えのある顔。響いていた卓球の打球音が鳴り止んだ、オレにはそう感じた。周りの人や背景が止まつた、あいつ人を除いて。

ハル……？

「気をつけ、礼！」

「よろしくおねがいしあーす」

ハジメ達や相手チームが号令に合わせて礼をする中、オレ一人呆然と立ち尽くしていた。ハジメが相手の代表者と対戦表を交換する。

「なんで、あいつが……？」

「ユウヤ君、こっちだよ？」

ケイ君が声をかけてくる。聞こえてはいた。いや、耳がからうじて声を拾い上げ、頭の片隅にうつすらと流れてしまふ。そんな感覚が、ハジメにラケットで小突かれるまで続いた。

「おーい。どうした？」

目の前のハジメの声で、視界のピントが元に戻った。

「お、おう。なにしてんだよ、さっさと試合してこい」

「人の邪魔しといてひどい言い草だな」

とりあえず台から離れることにした。

ハルが台の奥で試合を観戦してゐる。視線をはずそうとしても、いつの間にかあいつを視界に入れてしまう。ハルはオレを一切見ようとせずに応援をしたり、同じく観戦する隣のチームメイトと何か喋つてゐる。

オレは今、夢を見ているのではないだろうか？　他人のそら似で、全くの別人ではとも考えた。が、違つた。交換した対戦表には一番手ダブルスの欄の一つに、宇都宮春樹と書かれていた。同姓同名で顔がうり一つなんて、ありえない。

ハジメが横回転サーブを打つ。オレが教えた三つ目のサーブだ。まだ回転が甘いが、サーブの種類は多ければ多いほど良い。相手は回転に合わせながら、ハジメの台の奥深くに打ち込む。ぎりぎりのところをハジメが打ち返す、いや打つと言うより無理矢理ラケットを当てたに近く、球は高く浮いてしまつた。台に着地することなくアウト。ハジメが負けた。

「負けたあ！　くつそ、二人とも頼んだぞ」

ケイ君がハジメに笑顔で頷いた。

「頑張ろうね、ユウヤ君」

「うん……」

「……ユウヤ君?
うん……」
大丈夫?」

その17（後書き）

自分の試合直前にも関わらず気配りできる余裕がほしいものです。

オレはこれから本当にハルと打つのか？ もう一度とこんなことないと思ってた。ハルとそのパートナーが台についている。台に向かわなきやいけないのに、足が上手く動いてくれない。

ラリー開始。ハルから球が打ち出された。打たなきや、そう思うと体が萎縮してしまう。かろうじて返球し、そこそこにラリーを終わらせた。

「ラブオール」

ハルの相方がサーブの構えをする。頼む、打たないでくれ。始めないでくれ。

そんな願いも届かず、サーブが放られた。レシーバーのオレは、ツツツキをハルとは逆サイドの台の浅い箇所へ送る。だがハルは即座に腕を伸ばし、次にはフリック（台上で球を払うように打つことで球をケイ君側の台の奥に突き刺してきた。反応しきれず、球が台にバウンドしてそのままケイ君の体に当たった。

「ワンラブ」

心の片隅で、わずかな可能性を信じていた。同姓同名、うり二つの別人という、天文学的な数字の希望にすがっていた。現実味のない、願望と言つても良いものを自分勝手に肯定していた。だがたつた今、その可能性が潰えた。前人速攻の攻撃型。初球だというのに、いや初球だからこそ効果のある威圧的、挑戦的な球の軌道。何より、普段の温和な瞳から豹変する、打球時の鋭い眼光。間違いない、あいつはオレの知つているハルだ。

あいつは、オレが殺したハルだ。

べたべた。

腕に何かが粘りついている。

だがそれを直視できない。恐いんだ。

体育館にいる。

遠くでアヤがオレを見ていた。

助けてくれ。

何故かそうつぶやいていた。だがアヤの耳には届かない。

アヤに手を伸ばした。

そこで初めて、自分の腕が見えた。

赤。

べたべた。

なんだよ、これ。

足を何かがつかんだ。

反射的に視線を下に移す。

ハルだ。

頭から赤い液体を被つたかのようなハルが、オレの足に。
べたべた。

飛び起きた。荒い呼吸と汗ばんだ体が、ひどく陰鬱な気分にさせた。

「大丈夫か？」

「先生……？」

「お前、試合中に気失つたんだぞ？ 覚えてるか？」

「先生つ、ハルは？」

「……なんのことだ？」

真剣な表情のまま、オレを見つめ続ける三神先生。

「試合は、どうなったんですか？ ここは……？」

氣づくと白いベッドの上だった。

「病院だよ。すぐ救急車を呼んだ」

「会場につ、会場に戻して、早く!」

「喰い氣味に頼み込んだ。」

「なに息巻いてんだ? 戻つてももう意味ないぞ?」

三神先生が自分の腕に着けている腕時計を見た。窓の外は日が暮れようとしていた。

「戸田と牧野は田所先生が面倒見てくれてるから心配するな。あと、親御さんに連絡させてもらつたからな。もうすぐ来てくれる」

「……そう、ですか」

しばらくして診察室に連れて行かれた。オレは本当にハルと打ち合つたのだろうか?

その18（後書き）

文章量としては、この時点では半分と少しついたところです。

「「コウヤ、辞めんのかなー?」
「分からぬけど……」
ハジメ君が部室に寝転がりながら、しばらく黙り込みました。
「……どうしたんだろうね?」「さあ? 大会出てからメール返さないし電話出ないし、変だよ。
三神先生が言つては、倒れた原因はケガや病気とかじやないらしい
し」

「……お見舞いに行かない?」
「やめておこひざ。あいつの性格からして、そういうアリケートな
部分に触れて欲しくないと思うんだよ」

「そつか……」

「てか超あちい! 夏あちい!」
「うん、汗でびしょびしょ」

「もう無理、今度はおれ達が倒れるつー...」
「練習終わりにする?」

「だな、そろそろ脛だし。てか、夏休み中はもういいんじやね?」
「ウヤ来なきや練習しようがないだろ」

「え? うん、そうだね」

ハジメ君が制服に着替え始めました。

「各自、素振りや体力づくりを怠らないよつー。あ、今おれ部長
つぼくね?」

「あはは、ほんとだ!」

「まあおれが一番に自主練しなさそなだけじねー」
「ええー? 練習しなきやだよー」

ハジメ君はいつもぼくやコウヤ君を冗談で笑わせようとしてくれ
ます、一緒にいて楽しいです。

「で、ケイ君はまだ帰らないの?」

「あ、うん。もう少し残つてようかな」

「そか。じゃあおれ、バス乗るわー」

「うん、分かった」

「またメール送るから、百通りくらい送るからーー！」

「あははは、送りすぎだよー」

手を振つて、ハジメ君が部室から出て行きました。少しして、体育馆と学校棟をつなげる渡り廊下を女子卓球部の人達が通つていくのが見えました。みんなちょうど練習が終わつたようです。

部室にぼく一人が残りました。自主練開始です。

ぼくらが使つてゐる台は、一人分の陣地が別々になつてゐるもので、二面を繋げて一つの台になります。片方の面を端から持ち上げて垂直に立てます。もう片方は通常どおり地面と水平にし、垂直の面と直角に合わせます。あとはネットを張れば準備完了です。

台につき、サーブを打ちます。ぼくのサーブが垂直に立つ台に当たり、すぐ跳ね返つてきました。それを打つて、また球が跳ね返り、またそれを打つての繰り返しです。一人でラリーができるのです！
ユウヤ君に教えてもらいました。テンポを崩さないよう、冷静に、正確に。卓球の音つて、なんだかきれいですよね。リズミカルに打てたら、とても嬉しいです。

一人で練習し始めてから一時間も経つていきました。お弁当を持つてきてたので、少し遅めのお昼にします。タコさんワインナー！
お腹いっぱいになつたので練習再開、次はサーブです。通常どおりに台を設置し、狙う位置に空き缶を置きます。

ついー！

なかなか当たりません……。

一向に当たらないので、空き缶をもう一つ置きました。

ついー！

あつ、当たつた！ 狙つてなかつた方の缶に当たつた！ ……ま

ついー！

まだ練習が足りないようです。

日が暮れました。早く片付けないと。その時、上履きで廊下を歩く足音が聞こえたような気がしましたが、こんな時間に人がいるわけないですよね。

家に帰つて、ご飯を食べました。エビフライおいしかつたです。お風呂は長湯して少しのぼせてしました。机に向かって宿題をします。七月中に終わらせられるように頑張ります。少しテレビを見て、ベッドに入りました。おやすみなさい。

次の日も、練習をするために部室に行きました。今日は最初からぼく一人です。準備運動を入念にして、素振りをします。フォアハンド、バックハンド。素振りをする時は相手を想像しながらラケットを振るようになります。実戦のよつな緊張感が生まれる気がします。気がするだけな気もします。

「一人で練習してるの？」

部室のドアが開けられました。反射的に視線を移すと、その人と目が合いました。

「た、瀧野先輩？ び、どうしましたか？」

女子卓球部部長の瀧野先輩でした。

「大声出すことないでしょ？ 他のメンバーは？」

「ハ、ハジメ君もコウヤ君も今日は来てないです、自主練ですっ」

「ふーん」

体育の授業用の短パン、半袖姿の瀧野先輩がじつとぼくを見つめました。どうしよう、どうしよう……。

「……じゃあ、練習相手になつてあげるわ」

「……？」

聞き間違いかと思い、その場に立ち尽くしてぼくに瀧野先輩が、

「なにぼさつとじつるの？ 早く答こつきなさい」

「は、はいっ」

「まずはフォアハンドからよ」

そう言い、瀧野先輩が軽く球を出してくれましたが、返球し損じました。空振りです……。

怒られる！ そう思い、怖くなつて咄嗟に手をつぶつてしましました。

「ドンマイ、次打つわよ」

瀧野先輩が優しくフォローしてくれました。ゆっくり手を開きました。

「……はいっ」

次はちゃんと打ち返せました。瀧野先輩が打ちやすく返してくれたので、安定してラリーが続きました。

「うん、上手くなつたじゃない」

「そんなつ、こと、ないですよ？」

瀧野先輩が褒めてくれた！ 褒めてくれた！

しばらく打ち続けたので、お昼休憩をとることにしました。先輩と一緒に自動販売機でパンとジュースを買いました。

「そういえば、今日は瀧野先輩、女子卓球部の人達と練習してたんですね？」

部室の床に腰を降ろしながらそう訊くと、何故か瀧野先輩は、

「え？ ええ、そうだけど、ど、どうして？」

瀧野先輩が持っていたパンを落としそうになりました。

「ぼくの練習に付き合ってくれて良いんですか？ みんな待つてるんじや……」

「良いのよ。えと……そう！ 今日はもう練習が終わつて、解散したの」

「なんですか？ 誰も見かけなかつたけど」

「ほり、そろそろ練習するわよ！ ラケット持つ！」

「あ、はいっ」

やつぱり、人と打つのは楽しいです。いつの間にか夕焼け空になつていきました。瀧野先輩が最後まで相手をしてくれたので、昨日以上に時間の流れが早く感じました。

部室に鍵をかけ、瀧野先輩と一緒に鍵を職員室に返しに行きました。職員室までついてきてくれるなんて、瀧野先輩は本当に優しいです。

「三神先生、鍵を返しに来ました」

「はーい。あんたも一人でよくやるわね」

「今日は一人じゃなかつたんですね、瀧野先輩が」

「まつ、牧野君！」

呼ばれ、振り返ると瀧野先輩が廊下から顔を覗かせていました。「私のことは言わなくていいから」

すると三神先生が、

「あれ？ 瀧野、今日は練習ないん？」

「ええっ？ なんですか、聞こえないです！」

瀧野先輩が大声で聞き返しました。三神先生の声を搔き消すほど

の声でした。

「……牧野、お前も隅に置けないな～」

三神先生が、なんだかこそばゆそうな笑みを浮かべながらぼくを見つめました。

「え？ どういう意味？」

背中に気配、いつの間にか瀧野先輩がぼくの背後に立っていました。

「おいこの年増、牧野君に変な入れ知恵すんなや」「！」

「あ？ 誰が年増だあ？ お姉様と言い直せば許してやんよ」

「私がお姉様と呼ぶのは教会のシスターだけじゃボケ」

「シスター違いやがな」

怖いよお、二人とも映画とかに出てくるやべやさんになつちやつたよお……！」

瀧野先輩と同じバスに乗りました。一番後ろの席で一人分間を空けて座りました。

「瀧野先輩つて卓球上手ですよね」

「そんなことないわよ、ただ好きだけ」

「でも、好きなものを好きって言えるのって、すげこと思います」

「ええ？ 普通よ」

瀧野先輩がぼくを不思議そうに見ました。

「……牧野君は、中学の頃から卓球をやつてたの？」

「いえ、高校に入つてからです」

「どうして卓球？」

「うーん……」

ぼくは口下手なので上手く説明できるか少し自信がなくて、でもちゃんと説明しなくちゃと考えながら、

「ぼく、中学生の時はなんとなく人が多い部に入つたんですね。昔からあまり自分の意見を出さない性格で、その、人に流されること多かつたんです。でもそれじゃいけないと思つて、自分から動こうと」

「それで、卓球？」

「はい、同好会設立のポスターを見て、一から何かを創れたらしく」

「ちゃんと自分で考えて行動してんだからえらいよ」

「まだまだ下手ですけどね」

「冗談交じりにそう言いました。

「そんなことないし、今も真面目に練習してるじゃない。明日も学校で自主練するつもり?」

瀧野先輩にそう質問されました。

「はい、せっかく覚えたことを忘れたくないんで」

「……」

瀧野先輩は返事をせず、しばらく黙りました。何か言つちゃいけないこと言つちゃつたかな？

「じゃあ……」

「は、はい」

沈黙のあとの言葉を、緊張しながら聞き入りました。

「明日も部活が早く終わつたら、相手してあげるわ
また瀧野先輩と打てる！」

「はい、お願ひします！」

瀧野先輩の顔を見返しながら返事をしました。瀧野先輩は驚いたのか、顔をうつむかせてしまい、前髪で表情が見えませんでした。バスの小さな揺れと瀧野先輩とのおしゃべりが、なんだか心地良かったです。瀧野先輩の笑顔を初めて見ました。すごく、かわいらしかつたです。

「またメール送るから、百通りに送るからーー！」

「あははっ、送りすぎだよー！」

手を振ると、ケイ君が手を振り返してきた。部室をあとにする。下駄箱で靴を履き、外に出る。校門に向かいながら、コウヤのことを考えていた。

このまま放置したらばつてえ辞めるな。おれだつたら来づらくなるし。かと言つて変に首突つ込んでもなあ……。とにかく事情を理解しないと手の出しようがない。じゃあ、ビリで情報を？ うーん……。

校門を抜け、バス停に立ちながら頭ん中でぐるぐる考えるけど、良い案が出ない。そんな内にいつの間にかバスが田の前に停車した。乗り込み、後部座席に座つた。

ドアが閉まるのとする直前に、別の乗客が滑り込むように乗つてきた。一人の、おれと同じ高校の制服を着た女の子。てか、アヤちゃんいるじゃん！ ええ？ やばい、なんか緊張してきた！ 部活帰りか？ やつぱかわいい。

まずい、じつに来る！ 向こうがおれに気づく前に顔を伏せた。おれの二つ前の座席に一人が座つた。よし、やり過ごしたみたいだ。アヤちゃん今日は髪を後ろで結んでる。うなじが、うなじがああ！

落ち着けおれ。こんな偶然滅多にねえんだ、今田じそアヤちゃんとの接点を作るチャンスだ。とりあえず隠れてしまつた以上、不自然な行動に出るのはアウトだ。プロは百パーセントの安全を確保してからアクションを起こす。焦つて全てをおしゃかにするのは三流のすることだぜ。ここは冷静に様子を窺つことじよつ。あれ？ おれ、さつきまで重要なことで悩んでた気がするけど……ええい、そんなことどうでもいい！ おれは今できることビグストを貯くす

ゼー！

『どうやらアヤちゃんと一緒にいる女の子は同じ一年生のようだ。校章やネクタイの模様の色が垣間見える。部の仲良しへアで帰宅つてとこか。

問題はアヤちゃんにどうアピールするかだが、友達といい以上、一人の時間を奪うような真似したくない。実際、楽しそうに話してゐるなあ。会話を盗み聞きしたりはしないけど、ちょくちょく声あげて笑つて、前におれらの部室に来た時と全然違くね？

「……そういうえば……アヤ専用の練習……なんで……」

「……私が……やめてくださいって……先生も分かつてくれて……」

途切れ途切れではあるものの、聞こうとしてないのに一人の会話が耳に入つてきちゃう。ダメだ、盗み聞きなんて最低だろ！

「じゃ、またねー！」

途中のバス停でアヤちゃんの友達が降りた。うおお、これは話しかけるチャンスか？ え、ちょっと待て、おれとアヤちゃんの共通の話題つて……卓球？ あんま詳しくないぞ？ 下手したらそんなことも知らずに卓球してるの？ つて幻滅される可能性も……。どうしよう、嫌な汗が出てきた。ここはあえて、卓球以外の話題だる。

『好きな曲なにー？』

『……ないかな』

『休みだしどつか出かけるの？』

『別に……』

『そうなの？ おれ今度友達と海行くんだ！ 結構泳ぎ得意なんだよ

『ふーん』

「だめだあ！ この前話した時と同じ雰囲気だと、間違いなく無関心な答えしか返つてこねえええええ！ 一人延々と喋るだけか？」

おれ超うまいだけじゃんつー！

……やっぱりこは卓球のことを、初めてアヤちゃんを見た時のことと話をそつ。部活見学の日、コウヤがなにを見に行つたのか気になつて一階に上がり、先輩相手に打ち勝つ、格好良くてかわいいいアヤちゃんを見つけた時の、あの感情を伝えよつ。

席を立つた。アヤちゃんの座席まで、一步、二歩……あ。

音はたてず、ダッシュで引き返した。あつぶねー！ アヤちゃんヘッドフォンつけて外眺めて、めつちや一人の世界入つてたー！目に見えない分厚い壁あつたよぜつてえ！ てかイヤフォンじゃなくヘッドフォンとか、すんげえ意外、かわいいなちくしょうー！

しどりもどりしどりの間に駅に着いた。アヤちゃんがバスから降り、駅の中へ入つていく。だがおれは至つて冷静。なぜならアヤちゃんとコウヤは小学校からの幼馴染。それすなわち住んでる場所もそう遠くないはずだから、コウヤと同じ方向の電車にアヤちゃんも乗るはず。ならおれも途中まで同じ電車だから、車内で話しかければオールオッケイ！ 完璧だ、つけ入る隙がないぜ。

改札を抜けると、ホームに立つアヤちゃんが見えた。アヤちゃんが車両に入つていく。よし、あとは同じ車両に乗つて、偶然を裝つて話しかれば……。

自然に、電車に乗り込んだ。ちよつと下向いて携帯いじりながら、今どきの平凡な少年として何食わぬ顔で……わあ、ここでふつと視線をあげればそこにアヤちゃんがつ！

田の前に、大勢の人が立ち並んでいた。あれ、アヤちゃんビー……？ 満員電車とは予想外でした。

その20（後書き）

ハジメ視点その1。ちなみに私はうなじ好きではないですよ。
本当に信じてくれ！

ドアが閉まり、電車が発進した。まだ、諦めるにはまだ早いぜ……。アヤちゃんがこの車両にいるのは確かだ。車内を搜せば絶対いる。人と人の隙間を縫つて歩く。せまい、若干押し広げるようにな道を開ける。

その時だった。

「この人痴漢ですっ！」

スーツを着た女人の人甲高い声でそう叫んだ、おれの手をつかんで掲げながら。乗客の視線が一斉におれに集まる。

はあ？ はあ？

「ちょっと、違います、おれ痴漢じゃないっす！」

「ふざけんな、お尻触つたじゃないの！」

「触つてねえ！ 片手で鞄持つて、片手で道開けて、どう触るつうんだ！」

「子供なら何してもいいとでも思つてんの？」

「だから、違うつづーの！」

まずい、騒ぐなって！ 他の人めっちゃ見てるじゃん！ 身の潔白を誰か証明してくれないかと、周りを見回した。みんな怖い顔してるし、誰か……あつ。

目が合つた。その人はおれが追いかけていた、憧れていた、アヤちゃんだった。席にちょこんと座つていて。

ああああああああああああああ！ 一番見られたくない人に見られたああ！ アヤちゃん誤解だ、おれは無実なんだつ！ ……もう終わつた、こんな変態に誰が振り向くんだ。

ユウヤも卓球辞めそうだし、いつそのこと別の部でも創ろうか。そうだなあ……枕投げ部！ これだ、枕投げで全国を目指す！

「あの、その人痴漢じゃないです」

くらえ、低反発シユートオ！ 激まじい威力だ、おれはなんて恐

ろしい技を編み出して ええええ？ アヤちゃん、今なんて？

現実逃避してゐる場合じゃねえ！

「私見てましたが、あなたの体に当たつてたのは、後ろの人のバッグでした」

……なんだつて？

おれとスーツ姿の女が振り返る。見ると、若い女性が大きめの革製のバッグを手にしていた。服越しとはいえ、手のひらとバッグの柔らかさを間違うか？

「……ごめんなさい、私でつきり！」

さっきまで騒ぎ立てていたスーツ姿の女が頭を下げた。電車がちょうど停車し、ドアが開いた。

「あ、いえ、気にしないでください」

助かつた、アヤちゃんのおかげで誤解が解けた。アヤちゃんの方を向く。だがさっきまでアヤちゃんが座っていた席には、別の乗客が腰掛けていた。ドアが閉まり、電車が動き出した。

家に着いたら毎の十一時半になつていた。鞄を置き、ラフな格好に着替えた。冷蔵庫から冷えた緑茶を出し、コップに注ぐ。一気に飲み干した。

ありがとうを言えなかつた。アヤちゃんのおかげでビーチにか済んだけど、下手すりや警察沙汰だつたよな？ お礼を言わなきや。けど、次話せるのつていつになるんだ？

携帯のアドレス機能から、コウヤの番号を選択した。電話をかけるものの、一向に出ない。

うーん、他にアヤちゃんの携帯知つてそな人に聞いたら、変にちやかされそうでやだな。でも他に連絡先なんて……そうだ！ クラスの連絡網に家の電話番号が……あつた！ 見つけたものの、電話するのこえええ！ 落ち着いて深呼吸して、番号を押す。冷や汗出でね？ 大丈夫、いきなりコクるとかじやないんだから。

トウルルル、トウルルル。

ドクンドクン、ドクンドクン。

「はい、霧島ですが」

誰が出た。アヤちゃんじゃない、男の人だ。

「あ、あのっ、おれ、同じ高校の戸田というんですが、アヤさんはいらっしゃいますか？」

何故か相手は返事をせず、しばらく黙り込んだ。数秒だったのか
かもしれないが、おれにはひどく長く感じた。

「俺はアヤの兄なんだけど、悪いがまだあいつ帰つてきていなんだ。
もしかして君、アヤの彼氏？」

「いいえっ、まだそんなんじゃなくて、あ、いや、まだも何もない
んですけど！」

ぎやああ、何言つてんだ！

「その、今日電車の中で、おれが痴漢に間違えられたのをアヤさん
に助けていただいて、そのお礼が言いたくて電話しました」

必死に言葉をつなぐ。すると相手はまたも黙り続けてしばらくし
たあと、言葉を返してきた。

「……良く分からぬけど、話があるなら直接相手に言つたほうが
良いと思つんだが、違うか？」

「いいえ、そのとおりですっ」

「じゃあ、今日にでも家に来な。アヤも待つてるから」

家の住所を教えてもらい、電話を切つた。切る寸前、受話器越し
に含み笑いが聞こえた気がしたが、そんなわけない、聞き間違いだ
らう。

携帯を置き、胸を撫で下ろした。ふう、どうにか済んだ。アヤち
ゃんのお兄さんがいい人で良かった。手はずを整えてくれて、本
当に感謝しないとな。

午後三時、暑さ最高潮の時間。アスファルトが太陽に焦がされる。
おれは門の前に立ち尽くしていた。教えられた住所に指示どおりの
時間に。アヤちゃんの家は外壁が白くきれいなのと、公園のプラン

「が置けそつなほび広い庭があるのが印象的だつた。なかなかのお金持ち？」

インター ホンが、押せませんつ！ すんげえ緊張、暑い以外の理由で汗ダラダラ。礼儀正しく制服とかの方が良かつたかな？ 普段着のジーパンとTシャツ着てきちゃつたけど……。いいや大丈夫、この服はおれのタンス内ランキングでも一位一位に君臨するエリート。何度もこいつらには世話になつたんだ、趣旨がずれている気もするが、いくるはづ！ それに安物だけど、箱に入つたお菓子も買って初めでだ。そういうや人の家に訪問するときは相手を急かさないよう少し遅れていくべきとか聞いたことあるけど、時間どおりの方がよくね？ 礼を言う立場で遅刻とか態度悪くね？ どっちにすりやいいんだあああああ？

よし、もうインター ホン押しちまえ！ ずっと人ん家の前に立てたらそれこそ勘違いされる。指震えるんじやねえ、根性見せろや！

指を前に突き出そうとしたその時、門の奥のドアが開いた。

「あ、違うんです、怪しいものではなくて、今日こちらに来る約束をしていた者です！」

咄嗟に頭を下げ、まくしたてた。相手の反応がない、そろりと見上げた。そこにはおれより年上であろう男が立つていた。上はタンクトップで、下は短パンを履いている。ガタイが良い、アヤちゃんのお父さん？

「あの、もしかして電話に出て下せつた方ですか？」

「……おう、おれがアヤの兄貴だ」

「」の人がアヤちゃんのお兄さんか。ゆっくりとこっちに近寄つてくる。

「そうですか、今日はここのような機会をつけていただきまして本当に

アヤちゃんのお兄さんはおれの言葉を遮つて、野太い声を吐き出した。

「てめえがアヤを付け狙う痴漢野郎か、殺す！」

「なんか勘違いしてるひひひひ！」

「あの、そうじやなくて」

「問答無用っ！」

おれ目掛けて門越しに拳を突き出してきた。しゃがんで避けたものの、頭のてつぺんかすりましたよ？

「避けんなよ、殴れねえだろ？」

「まずい、田が本氣だ。」

「違うんです、お兄さん落ち着いてください！」

「てめえに兄呼ばわりされる覚えはねえっ！」

アヤちゃんのお兄さんが門に手をかけた瞬間、おれは全力で走り出した。

その21（後書き）

ハジメ視点その2。

この話から1年後、ハジメ率いる枕投げ部が考案した投法「トップオブザテンピュール」がアメリカ代表に猛威を奮い、世界大会を制したとか制さないとか。

携帯が鳴った。ディスプレイを開くと、ハジメからの電話だった。鳴り続ける携帯をじっと睨む。しばらくして鳴り止み、画面は十二時半を表示するだけとなつた。

ベッドに横たわつた。クーラーの小さな誰風音と、見てもいないテレビの音だけが自室に立ち込める。

夏休みの宿題しねーとな。

机の横にかけた鞄を開くと、各教科の問題集やらプリントやらが溢れ返つていた。外に取り出さずには指でいくつかめくるも、嫌気が差してすぐに鞄を元に戻した。またベッドの上で仰向けになつた。いつもなにやつてたつかけか。去年は受験勉強してて遊べなかつたけど……。卓球ばつかやつてた気がする。タケシ先輩が声かけた卓球の練習会に出させてもらつたり、ハルとか他校の同い年を集めて試合してたつかけ、そういうえば。

腹減つたな。一階に下りると、母さんが台所に立つていた。

「お昼そつめんでいいよね?」

「また? 飽きた」

母さんがむすつとしながら振り返つた。

「……じゃあおそばは? うどんは? 冷やし中華にする? 具な

しだけど」

「……麺ばつかじやん」

「じゃあ自分で作りなさい」

「へいへい」

冷蔵庫を開ける。バター、醤油、めんつゆ、キャベツ、冷やし中華の麺、ろくなものがない。

「買い物してないの?」

「だって、外暑いんだもの」

呆れてため息が出た。

「頂いたそめんとかあるし、いいでしょ？」

「いいわけがない。

玄関のドアを開けた。熱気が全身に襲い掛かってきた。

太陽がアスファルトを焦がす。すぐそこコンビニに行くだけで汗が流れた。

コンビニの中に入ると一気に冷たい空気がオレを包んだ。ああ、天国だ……。

少し雑誌を立ち読みしたあと、弁当の置かれた棚に向かった。が、棚は見事に空っぽ。しまった、販売によくある品切れだ。のんびりしてた場合じゃなかつた。

自動ドアが開く音がした。特に気にせず、どうじよつが立ちぬくしていた。ここらへん、他はファミレスくらいしかねえしなあ……。

「ねえ

後ろから声をかけられた。

「うお、なんだよ？」

アヤだつた。こいつはいつもいきなり現れやがつて。制服を着て、肩に鞄をかけ、片手に紙袋を持っていた。

「弁当買いに来ただけ」

棚の前に突つ立つオレが邪魔だと言いたいらしい。どいて棚を見てやる。

「……ないね」

「お前、昼飯いつも弁当なの？」

「今日は親が出かけてるから」

オレとアヤは割と家が近く、この辺りの地理も同等に頭に入っている。

「ファミレス行くけど、一緒に行く？」

「んー、いいけど」

すんなりオレの提案に応じた。またくそ暑い外を歩くと思つと気が滅入つた。

「部活帰り？」

冷房のきいたファミレスでオレはジンジャー・エールを、アヤはウーロン茶を飲んでいた。

「うん」

「その袋も部活で使ったの？」

「帰りに買い物してきた。ワンピ」

「ふーん」

氷がからからと涼しげな音をたてる。

「そつちはどうなの？」

「なにが？」

アヤに質問し返した。

「……ううと、なんでもない」

卓球のこと訊いてるんだよな絶対。分かってる、分かってはいる。注文したメニューが届いた。バジルスパゲティをフォークに巻きつけ、口に運ぶアヤ。それ以上踏み込んだ話をしてくる様子もない。オレも自分が頼んだハンバーグを食べ始めた。

大した話はしなかつた。オレがそれ以上訊くなオーラを出していたのかもしれないが、クラスの話とかどうでもいい会話しかしなかつた。

「ユウヤアアアアアアア！」

ファミレスのガラス窓の外から、オレの名前を叫ぶ声が聞こえた。驚いて振り向くと、顔を窓に貼り付けてこちらを凝視するハジメがいた。

「……お前、まさかオレを同好会に連れ戻しに」

「ちげえから！ まじ助けて！」

ハジメの後ろから、別の声が聞こえた。じつい。

「まあてええええええ！」

「お兄ちゃん？」

アヤの反応どおり、声の主はタケシ先輩だった。全速力でこちらに向かってくる。

「ぎやあああ！」

ハジメが猛スピードで逃げていった。何が起きてるんだ……？

「アヤ、わりい。会計しといて！」

金を財布ごと置いて、一人店を飛び出した。

一人が通つていった道を追いかけてみたが、とっくに見失つていった。闇雲に走る。あの温厚なタケシ先輩が鬼の形相で追いかけてたんだ、相當まずいのは確かだ。

十字路に差しかかる。くそ、どつちだ？

「ユウヤつ！」

右方向からハジメの声がした。どこで入れ違つたんだか。目の前に止まり、息を切らすハジメ。

「お前なにしでかした？ 怒んねえから言えボケエ！」

「もうすでに怒つてるじやんか！」

その時、地鳴りのような音が近づいてきた。振り返る。

「見つけたあああああ！」

「げつ、タケシ先輩！」

タケシ先輩が全身をつかつて跳躍した、ハジメに向かつて飛びかかるてくる。もう、ダメだ……！

「お兄ちゃんストップ！」

アヤの声。叫び声が遠くからした。次には何かが落ちてこされる音が重々しく聞こえた。身構えていたオレとハジメが恐る恐る田を開くと、タケシ先輩が砂埃をあげながら地面に突つ伏していた。

アヤが駆け寄つてくる。

「アヤ、お前なにしてんだ？」

「お兄ちゃんこそなんで、この、ええと名前……」

「ハジメだつて」

オレがフォローした。ハジメはショックを隠そつと顔をつづみかせた。

「そう、なんでハジメ君を追いかてるの？」

「ハジメ君？ え？ だつてこいつはアヤを狙う痴漢でストーカー

で変態で、害虫でしかないくず野郎だろ？」

イメージが最低すぎる。

「あの、何か勘違いされてるようですが、おれは痴漢に間違えられたのをアヤさんに助けて頂いた者です」

タケシ先輩がぽかんと口を開いて、思考が停止したかのようになつた。が、アヤが睨んでいるのに気づいて、一瞬身震いした。

「すまなかつた！」

その22（後書き）

昔冷蔵庫に何もなくて、賞味期限の切れた冷やし中華にきゅうりだけのせて食べたことがあります。虚しさがハンパない。

部室の鍵を開け、中に入る。八月朝の部室は熱気が立ち込めており、窓を開けると鬱陶しく張り付いてくるような生暖かい空気が入り込んできた。

体操着に着替えて、ラケットを取り出した。ラバーを貼り付ける。ラケットの準備すると、これから卓球するつて感じがする。やっぱ落ち着く。

「ういっす」

ハジメがやつてきた。

「あ～つ～い～」

「練習する前からそんなんでどうするんだよ？」

「職員室行かね？ 冷房ガンガン！」

「お前何しに来たんだ？」

またドアが開いた。

「ういーす」

「あれ、タケシ先輩？」

「ええ？ どうしたんですか？」

今日はオレとハジメの一人で練習する予定だった。この前の騒動のあと、一人で話でもしながら卓球する約束をしていたんだが、タケシ先輩、オレ達の話を聞いて来たのか。

「ちょっとくら打たせてもらうぞ」

「いや、いいんですけど、受験勉強とか大丈夫なんですか？」

「ああ、俺もう進路決まった」

「ええ？ まだ八月なのにですか？」

「一般入試以外にもやり方はあるんだよ」

ハジメが神妙な面持ちで言葉をこぼした。

「う、裏口入学……？」

「ちげえ！ 推薦もらつたんじや！ 大したとこじやないけどな」

「おめでとうござります！」

話していると、廊下から何やら笑い声が聞こえてきた。足音が部室に向かってくる。ドアが開いた。

「…………あ、れ…………？」

ケイ君と瀧野先輩だった。オレ達がどんな表情をしていたか分からぬが、瀧野先輩はりんごくらいに顔を赤くさせていた。

「な、ななななんでででで？」

「た、瀧野先輩こそな

「きやあああああ！」

瀧野先輩が奇声をあげながら走り去っていった。残されたケイ君は、ただただ伸ばした手の行き場を失っていた。

「ケイ君！」

ハジメがにやにや笑いながら、

「ねえねえ、何で瀧野先輩と一緒にだったの？ 付き合ってるの？」

「いつから？ 何がきっかけ？」

「そつ、そんなのじゃないよ！」

あからさまに赤面するケイ君。凶星？

「ぼくが自主練してたら一緒に打つてくれて……それより、この人は？」

タケシ先輩がケイ君の方を見た。

「ぬわつ！」

「ひいつ！」

「タケシ先輩、からかわないでくださいよー」

「わりいわりい、なんかいじりたくなる顔してたから」

初対面の人間までもそう思つてしまうのか。

「この人は霧島剛先輩。ほら、人数足りなかつたところを先輩一人が入つてくれたって言つたじゃん？ その人」

「ああ！ その節はありがとうござい

「ぬわつ！」

「ひいつ！」

「だから先輩……」

「はつはつはつ、ひいひはからかい甲斐があるな」

タケシ先輩が豪快に笑った。

「とりあえず練習しようぜー」

「ユウヤ君は、もう大丈夫なの？」

ケイ君がおどおどしながらそう訊いてきた。

「あー、もう大丈夫、かな」

「あまり無理しないでね」

「いづら、優しすぎるんだよ。

「あ、ちょっと電話するね、します」

携帯片手に廊下へ出て行つた。ハジメがそろそろドアの前に立ち、聞き耳をたてた。

「おいハジメ、やめてやれよ」

「しーつ、静かに」

「ほら、お前もこっち来い」

タケシ先輩までそんなまねして……。

「…………あ、もしもし……はい……瀧野先輩も一緒に……はい……
はい……分かりました……え？……はい！……ぜひ……じゃ
あ今度……また連絡します……はい、また……」
電話を切つたらしい、ドアに向かつてくる。

「離れろっ」

タケシ先輩が小声で指示した。

「戻りましたー」

ケイ君がドアを開けた。

「ほらケイ君、ぼさつとしてないで準備準備！」

ケイ君が戻るや否や、ハジメが急かす。

「そうだ、さつさと着替えるんだ！ さあ早くっ」

「あ、はい！ 先輩すみません！」

盗み聞きした事実をひた隠しするために練習を始めるハジメとタケシ先輩。この二人、なぜか息がぴつたりだ。

「つぶはあ、あつがなついぜえ！」

「タケシ先輩下らないっすよー」

「へつへつ、ラムネはビン入りに限るぜ
空一面茜色に染まる。コンビニの前で、オレとタケシ先輩二人は
たむろつていた。

「また来週も練習来てくれるんですね？」

「おう、俺も一会员だからな。お前こそ練習出るのか？ 最近さほ
つてたんだろ？」

「……情報がはやいですね」

「ちょっと耳にした。お前、この前の大合で倒れたんだって？」

「別に体調崩してとかじやなかつたんですけどね……」

「……なにあつたよ？」

タケシ先輩は体もだが、器がオレとは比べられないほどでかい。
頼つても、この人ならしつかりと支えてくれる。そういう人だつた
な。

「……ちょっとここです」

歯を見せながら能天気に笑つてみせた。

「お前は相変わらずだなー」

「そんなことないですよ？」

「おお？ 毛でも生えたか？」

「そんなもんとっくです。あと……」

ペットボトルを口に運び、中身を飲み干した。

「次は勝ちますよ、大会」

その23（後書き）

もう少しある物語りも終盤なのじや。

どしゃぶりだ。アスファルトの上に波が行き来し、排水溝に吸い込まれていく。頭上で開く透明傘を見上げた。無数の雨粒が傘の表面にぶつかっては砕け、色を持たない水滴がいくつも消滅していく。空は雨雲で覆われ、太陽の光が遮られている。朝だというのにやけに暗い。音が全身を包む。自分自身が鳴り止まない雨音と同化し、消えていくかのようだつた。

「コウヤ、中入るぞー」

降りしきる雨の中、ハジメに大声で呼ばれた。

雨で視界が悪いが、一目で思い出せる。こゝは、夢で見た体育館。忘れようとしてた、あの場所だ。

陣取つた席に鞄を置き、会場を見下ろす。しばらく目が離せなかつた。

開会式が終わり、ジャケットを羽織る。会場では全ての台で試合が始まつていた。

「暇だなー」

ハジメが隣で同意を求めるように愚痴た。

「しようがないよ、今日の大会は団体戦六人いないと出れないんだから」

ケイ君が説き伏せた。

「分かつてつけどー」

「みどりちゃん、今何時ー？」

座りながら三神先生にそう言つタケシ先輩。

「みどりちゃん？」

オレ達一年が同時に疑問符を浮かべた。

「霧島、下の名前で呼ぶなつーの」

「いいじやん、今更直せないしー」

「……先輩、三神先生知つてたんですね」

「ね、みどりちゃんの授業受けてるんだよ」

「寝てるのを叩き起こされてますの間違いだろ?」

威嚇するかのような三神先生の視線に、タケシ先輩は笑つて返した。

「女子の試合始まりますよ」

オレがそう言つと、タケシ先輩もフロアを見下ろした。

「お、アヤも出るみたいだな」

オレ達から見てすぐ前で、女卓が台についた。

卓球が好きだつた。

いや、好きだつたかですか、今となつては曖昧に思えてきた。思
い出はいつだつて美化されている。あの頃の感情だつて、振り返れ
ばそつだつたかもしないといつ推測程度に過ぎない。

ならなぜまだ引きずつてゐるのだろう。周りの目を気にしている
のもあるけど、それが一番ではない。逃げたくない、負けたくない。
何かするわけでなくとも、どこかで逆らおうとする反骨的な感情を
抱えているように思える。

「アヤちゃん、あなた一軍の一一番手ね」

意味が分からなかつた。部長に聞き返した。

「私ですか?」

「そうよ」

真つ直ぐな瞳で見つめられた。

「……分かりました」

一年の私は団体戦では一軍の予定のはずだつた。突然の変更。困
惑して、その場に立つけくしてしまつた。

「……ほら、フロア行くよ」

後ろから声をかけられた。部長の声じゃない、他の先輩が私に声

をかえ、階段を下りていつた。

だって、私のこと嫌いなんじや？

「みんな、アヤちゃんが頑張ってるのを見てたのよ」
部長が私の肩に手を添えて、そう言ってくれた。

ここにいてもいいんですか？

「うー、置一かー？」

先輩達が呼んでくれた。

一行
アヤちゃん

「が、私の居場所がござる」

「やつと俺達の出番か」

ですか

「よし、したら円陣組むか！」

「良いですね！」

三浦先生含め全員その場に集まり、輪の中心で手を重ねた。「よつしや、やるからに勝つていい。負けんじやねえぞ、

り倒せえ！」

タカシ先輩が鳥を吸い入る。

「ピンポン同好会

「アーヴィング、おー！」

円陣を解いて、タケシ先輩が何か思い出すよ」とふせした。

「きたなつ!」「

その24（後書き）

じゃがりこスパイシー・チキン味食べてきた。おいしかったけど、やっぱりサラダ味に限る。

「あんま緊張すんなよー」

「うん、行つてくる！」

ラケットを持って、ケイ君が席を立つた。

「ケイ君、がんばつてねー！」

「ケイ君ケイくーん！」

隣の女卓の先輩達もケイ君に声をかけてきた。律儀に返事するケイ君。そこにちょうど瀧野先輩がフロアから上がってきた。ケイ君と瀧野先輩がすれ違い際に顔を合わせた。

「ケイ君、がんばつてね」

「えへへ、行つてきます」

その場にいた全員が一人を凝視した。視線に気づく瀧野先輩。

「え、ちょっと、なに？」

瀧野先輩が視線にたじろいだ。

「今、部長がケイ君つて……。前まで牧野君つて呼び方だったのに……」

「ええ？ 部長、ケイ君どういう関係？」

「ケイ君になにしたんですか？」

「何もしてないわよ！」

瀧野先輩がケイ君の方を見た。見つめられ、ケイ君はにっこりと微笑んだ。

「ちょっと、なにその二人は分かち合えてるみたいな？」

「部長いやらしいっ！ こんな純粋な子に！」

「こり、変なこと言わない！」

「えと、試合いってきます！」

ケイ君がフロアへ駆けた。残された瀧野先輩を、女卓の面子がにやにやと見つめていた。

ケイ君の試合が始まった。

ケイ君が下回転サーブを打つ。相手はツツツキすると、即座に後ろに下がつた。ケイ君もツツキで返す。相手は次に、腕を上から下に大きく振り落とした。カットマンだ！ 球はゆるやかな速度で、だがネットぎりぎりの高さでケイ君の元へ。球はあまり跳ねず、ケイ君はツツキしたがネットに引っかかつてしまつた。

初戦からカットマンを相手にするなんて……。

カットマンは、相手が打つ球に下回転をかけて返し、相手がミスするまで粘るか、相手からのチャンスボールをスマッシュやドライブで決める、かなり高度なプレイスタイルだ。独特な戦い方ゆえにプレイヤーはさほど多くはないが、苦手な選手にとつてはまさに沼に引き込まれるような試合になる。

相手は相当手馴れているように見える。カットマン特有の、腕の振り落としがなめらかできれいだ。

カットされた球をケイ君がツツキで返したが、回転を見誤つたのだろう、台上に高く浮いてしまつた。問答無用のスマッシュが打たれる。台から下がり、球を追いかけるケイ君。だがラケットは届かず、その場に転んでしまつた。

カットマンに翻弄され続けていた。球の回転、軌道によつて、弄ばれるだけのゲーム進行。だが変化は、唐突に起つた。

ケイ君が腕を下から上に勢い良く振り上げた。まくるような大振りで球をこすり上げる。球はゆっくりと弧を描きながら台の奥に入り、回転数を損なわないまま高くバウンドした。ループドライブだ……！ カットマンは台から大きく遠ざかり、後方から今までよりも少し高い位置で軽くカットした。弱い下回転で、しかも球の位置は高い。ケイ君がラケットを高々と上げた。

渾身のスマッシュ！

カットマンが床すれすれでさばいた。だが甘い、もうすでにケイ君は次に備えてラケットを振りかざしている。スマッシュ、スマッシュ、スマッシュ。何度もカットマンが拾うが、そのたびにケイ君がスマッシュで返す。規則正しい、はじけるようなラリー。両者手

を止めない、引かない、諦めない。

ケイ君がスマッシュではなく、ラケットの面を上に向け、ツツツキの構えをした。カットマンが急ぎ足で台に詰め寄る。球の高度がみるみる下がるが、ケイ君は打とうとしない。十分に落ちたところを見計らい、ケイ君がラケットを引き寄せた。下から顔前に向かって振り上げる。カットマンが足を止めて後退しようとするも遅かつた。ケイ君のドライブショットが台の奥底にねじ込まれ、バウンドした球が床に転がつていった。

ケイ君は放心したように、数秒間その場から動かなかつた。

フロアから階段を上り、荷物を置いた席に戻ると、ケイ君と三神先生が待つていた。

「ユウヤ君、一回戦突破だね！」

「ああ、オレの相手は雑魚だつたからな。それよりケイ君こそすこいよ！ 良く勝てたね」

「ありがとー！」

無垢な笑顔でそう答えてきた。

「まさかカットマン相手に心理戦で上いくとはね。本当に上手くなつた」

「そんなんに褒めないでよー」

階段を上る足音が聞こえた。

「ユウヤ、ケイ君、なんでおれ勝てないのかなあ？」

半べそかきながら質問するハジメ。

「才能ないんじゃね？」

「ユウヤつめたつ！」

本当のことと言えば、実力はそれなりについでるはず。あとは相手との駆け引きさえできるようになればつてとこか。

「」、今度の休日一緒に練習しよ！ 練習すれば強くなるよー」

席でうなだれてたハジメが、ケイ君に向かって顔を上げた。

「えー？ だつてケイ君、最近は毎週末瀧野先輩と練習して、その

あとは決まって二人っきりで買い物したりご飯食べたりしてるんで
しょ？ 時間割いてもらつなんて悪いよー」

「ど、どうしてそれを知ってるの？」

「おれの情報収集力はケイ君も知ってるはずだろ？」
ハジメの目から鋭い光を一瞬感じた。

「……はあ～」

相当ショックだったのだろう、ため息なんて珍しい。

「ハジメ」

三神先生が声をかけた。

「……はい？」

「しかたないさ、お前には所詮無理だつたんだよー」

「先生のばかあつ！」

その25（後書き）

自分はカットマン苦手です。だっておれ筋筋だし。

三回戦まで勝ち進んだ。そして四回戦目の対戦相手が誰なのかも、すでに分かっていた。

台をはさんで、ハルと向き合つた。

ハルともう一度打つため。そのための今日。もしかしたらぶつからずに終わるかもしぬなかつた。だがどうして、この時を信じて止まなかつた。これはオレの単なる自己満足なのかもしない。だけど他に解決策が見つからぬ、これしか思いつかない。

いくら田を背けても、本当の意味で逃げることなんてできやしないんだ。目の前のハルがそう証明している。

「ラブオール」

横回転をかけながら台の奥にサーブを打つ。フリックを打たせないよう、なるべく深い位置へ。ハルは球を無理矢理ねじ伏せてドライブショットを打つてきた。ショッパン違う回転をかけくる、ハルらしい。バックハンドでブロック（ドライブの回転量に合わせてラケットの角度を変え、押すように打つ守備的な打法）する。ハルは容赦なくオレのバックに集中して攻めてくる。

忘れられない、中学二年。冬の大会。この体育館。先輩達がいなくなり、いよいよオレ達の部は落ちるところまで落ちていた。元々やる気のなかつた二年生は、耳障りな先輩がいなくなつたと言わんばかりに堕落し、そんな先輩に戸惑つ一年生も部から遠のいていた。大会は形式上出るだけ。さつさと負けた方がらくといつ無氣力さ。我慢の限界だつた。

今度はサーブをかけられるだけ下に回転をかけ、台の浅くも深くもない中間、ハルの体中央に重なるように返す。ドライブもフリックもまともに受けていられない、限界までバックスピンをかけ、ツ

ツツキ戦に持ち込もうとする。ハルはそれを見抜いてか、即座に体勢を低くし、思い切り体を持ち上げるようにループドライブを打つてきた。上回転のかかった球が山なりに返ってくる。狙いどおりにいかねえ、こっちもフォアハンドで打ち込む。力まかせな打ち合いの連続。ハルは打つタイミングがわずかに早い、一見五分五分な打ち合いに見えるが、ペースを握っているのはハルだ。流れを変えられず、ネットに引っかかり失点。

団体戦で負けたというのにへらへら笑つてやがつた。誰一人悔し
がる奴はいなくて、気が付いたらその内の一人の胸倉をつかんでた。
一触即発の中で、ハルが仲裁に入ろうとした。こいつはバカみたい
に人が良いから、対戦相手だつたオレ達の内輪もめにまで首突つ込
もうとしたんだ。どこまでお人よしなんだ。

球が大きく浮いた。その先ではハルがラケットを高く構えている。
落ち着け、ハルのラケットを、動作を一瞬でも見逃すな。ラケット
の芯に当たる甲高い音と共にスマッシュが放たれる。球が来るであ
るう場所に向かつて、ラケットの面を突き出した。スマッシュの速
度そのまま球をハルの台目掛けてはじき返す。

卓球台がぶつかつて揺れる音と、大げさなほど鈍い音が響いて、
全員の視線が音のした方向に集まつた。感触が手に残つていた。

そんなつもりなかつた。ましてや憎くもない相手を、自分のことを理解してくれる数少ない友達を。ハルが急いで医務室に連れて行
かれた。ハルを傷つけてしまつた。

その場では何も異常がないと言い渡された。そのあとの試合は自
肅したものの、ハル自身いつもどおりだつた。傷つけたオレを慰めてくれる、普段と変わらないハルだつた、その時までは。

後日、ハルの家に行つた。大勢の人が集まつてあり、みんな黒い
服を着ていた。玄関から棺桶が運ばれ、黒の車体に金色の造形があ

しらわれた靈柩車に積まれようとしていた。

「突然だつたらしいな」

「親より先に死ぬなんて」

「そんな……ばかな……だつて、いつもどおりだつたじゃんかよ……」

頭の中が真っ白になり、いつの間にかオレは、逃げるように駆け出していた。

台の浅い位置でバウンドした球に向かつてハルが腕を伸ばし、フリックで攻めてきた。もう一度ライジングで返す。ハルの球速を逆手に取り、ハル自身返しづらくさせる。案の定、体勢が崩れた状態で打ち返してきた。高く浮いた球が近寄ってくる。

ハルの台田掛けて、球を叩き付けた。手を伸ばすハル。だが、球はラケットの横すれすれを通り抜けて行つた。

「ゲームセット」

審判のゴールをよそに、オレは台に突つ伏していた。目頭が熱い。ハルのことが大好きだつた。罪悪感に駆られていた。一度逃げ出したらもう取り返しがつかなくなつていた。

許してほしい。我がままなのは分かつてゐる。だけどあの頃のようになに話したい、一緒に卓球がしたい。もう一度、友達になつてほしい。泣きながら、何度もハルにごめんと言つた。腹の奥底に抱えてたものを全て吐き出してしまつたかった。

雨音と泣き声とピンポン球の打球音。潤んだ瞳で、ハルの顔がぼやけて見えた。

その26（後書き）

次回最終回です。

その27（終）

「はあ？ お前死んでなかつたのかよ？」
ハルが人差し指をたてて小さく「シーッ」と言つた。
「電車の中で大声出しちゃダメでしょ？」
周りの視線がオレに集まつていた。
「……いや、だつてオレ、お前ん家から棺桶出でくるの見たぞ？」
「棺桶？」
「一昨年の冬！ 前もつて連絡とつて、家行つたら喪服着てる人
だかりがてきて、親より先に死んだとか……」
考え込んでからしばらくして、
「ああ、それもしかして、おじいちゃんのことじやない？」
「……は？」
「ちょうどその頃におじいちゃん亡くなつたんだよ」
「親より先について！」
「ひいじいちゃんひいばあちゃんはまだ元気なんだー」
にこやかに答えてきた。
「連絡したの？ 聞いてないけど」
「ハルがいなかつたから伝言頼んだんだ。会えないよつならハルの
方からかけ直すようにして下さつて」
「誰に伝言頼んだの？」
「ええと……」
記憶をたどる。
「……しわがれた声の、お年寄りらしき人だつた……」
「じゃあさ、何で死んだ僕が試合に出てると思ったの？」
「……靈に化けたのかと」
「あはは！ ユウヤつて前からそそつかしいよね」
「……オレは、ずっとこんな勘違いに悩まされてきたのか？ バカ
か？ バカなのかオレは？」

「うん、バカだねー」

今まで誤解してた分のイライラ含めてむかついたので、ハルのほつペをつねつてハツ当たりした。

電車とバスを乗り継ぎ、夏の大会が開かれた体育館に着いた。今日は卓球場が一般開放されている。オレとハルに向かつてハジメが手を振つた。みんな揃つてるようだ。

「おせえよユウヤ！ それと宇都宮君だつけ？」

「ハルでいいよー」

「わりい。あれ、ケイ君は？」

自分の背後に向かつて親指を立てるハジメ。女子の先輩達が集まつていた。

「ケイ君、今日は私と練習しようね？」

「あ、はい」

「あ、じゃあその次あたしー！」

ケイ君に群がる先輩達。おもむろに瀧野先輩が女子の輪を突き破り、ケイ君を引きずり出した。見せ付けるようにケイ君を抱きしめる瀧野先輩。

「部長するいつ！」

「離れるー！」

「ダメよ、この子は私のなんだから」

「先輩、く、苦しいですっ」

もう隠す気ゼロだな。

「アヤさん、おれと打つて下さい！」

おお、ハジメが積極的に行動してる。

「うん。ええと、ハマジ君だっけ？」

まだアヤに名前覚えられてないのか、哀れな奴。

「おいてめえ、アヤに少しでもおかしなことしたらぶん殴るからなー、タケシ先輩ももういらしてたんですか？ あ、この前の大会すごかつたですね、三位なんてなかなか取れないですよ！」

「はつはつはつ、ちよろこもんだぜ」

「ダメだよお兄ちゃん。一年生に負けたなんて、年上の威儀ないよ
「アヤア、ずいぶん辛口に育つたんだなあ！」

「よおし、久しぶりに打つかー！」

「中嶋じゃん、お前も練習すんの？」

「あ、おれがなかちん呼んどいたー」

「ちょっと中嶋君、今日は私とデートじゃなかつたの？」

「ああ、みさ子ちゃんごめん、忘れてた！ てか、なんでここのが
分かつたの？」

「あなたの携帯電話に発信機を付けといたわ！ これでどこにいて
も丸分かりなんだからね！」

「こええええ！」

「おいハジメ、どうすんだよここつら？」

「まあ、いいんじゃね？ 初心者同士で打たせてりや……」

「お前ら全員揃つたかー？」

「あれ、三神先生いたんですか？」

「大人数で練習つて聞いてな、念のため顧問同伴だ」

「先生、いつもどおり暇なんですね」

「誰が暇だハジメてめえ！ 悪かったな、旦那どころか彼氏もいな
いどフリーで！」

「先生ごめんなひやい！ 口が破けます、いひやい！」

「あははは、ユウヤと同じくらい面白い人ばっかりだねー！」

「あーもううつせえ！ セツセツ打つぞー！」

その27（終）（後書き）

ここまで読んでくださった方がいましたら、本当にありがとうございます。
いました。感想など頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251v/>

たっпон！

2011年8月30日03時28分発行